

平成 28・29 年期神奈川県青少年問題協議会

# 「若者による地域づくりのカタチ」

～若者のチカラを地域のチカラに～

平成 30 年 3 月

神奈川県青少年問題協議会

## 目 次

平成 28・29 年期神奈川県青少年問題協議会報告の概要	1
<b>第 1 章 審議テーマ等</b>	
1 審議テーマの設定について	3
2 本報告書の目的・対象	4
3 協議の経過と本報告書の構成	5
<b>第 2 章 4 つの論点～若者と地域の現状と背景～</b>	
1 若者の「チカラ」について	7
2 大人と若者の関係について	7
3 若者の参画について	8
4 地域の状況について	9
<b>第 3 章 3 つの視点～「若者」と「地域の関わり」を考える～</b>	
1 若者と大人がつながり、ともに場をつくる	11
2 若者と大人がともに経験する	14
3 若者と大人がともに進む	15
<b>第 4 章 実践検証事業～若者を中心とした多世代交流の場～</b>	
1 実施概要	18
2 検証結果	28
<b>第 5 章 5 つの提言～若者が活躍する地域づくりを進めるために～</b>	
提言 1「地域と地域づくり」～場の創出～	31
提言 2「人と人をつなげる」～つながりの創出～	31
提言 3「若者と大人が共感し合える関係を育む」～対等な関係性の構築～	32
提言 4「若者と大人がともに地域をつくる」～相互理解と協働～	32
提言 5「場づくりを担う人に求められること」～寛容な場の醸成～	33
おわりに～共感的な関係を育む人材を育成する～	34
<b>参考編</b>	
審議テーマに関する説明図表	36
平成 28・29 年期神奈川県青少年問題協議会実践検証事業業務委託報告書	42
<b>資料編</b>	
1 平成 28・29 年期神奈川県青少年問題協議会審議経過	58
2 平成 28・29 年期神奈川県青少年問題協議会委員	59

## 平成 28・29 年期神奈川県青少年問題協議会報告の概要

「若者による地域づくりのカタチ」～若者のチカラを地域のチカラに～

### 1 審議テーマの設定

平成 28 年3月に改定した「かながわ青少年育成・支援指針」を踏まえ、青少年の成長と自立を支援する新たな施策を展開する上で、当事者である若者が主体となって大人とパートナーシップを組みながら地域づくりを進めることが重要であるとの視点に立ち、若者や、若者と大人との関係性、地域のあり方や取組みの方向性などについて調査審議を行うこととした。

### 2 4つの論点～若者と地域の現状と背景～

#### 1 若者の「チカラ」について

- ・若者には、これまで大人や社会が必要と考える能力(知識や情報を活用する能力など)を身につけることが期待されてきた。
- ・若者の「チカラ」は、生活する中で自然と身につく、具体的な状況や関係性の中で発揮される「チカラ」と捉える必要がある。こうした「チカラ」は、若者の存在自体が大人や社会に与える「影響力」と表現できる。

#### 2 大人と若者の関係について

- ・若者が多様な年代の大人に出会うことが少なくなり、大人と若者の信頼の絆は育まれにくくなっている。
- ・若者が弱さを出したり、弱さを共有できないことが、大人と若者との信頼と寛容の関係をつくる上で障壁となっている。

#### 3 若者の参画について

- ・大人と若者の関係については、「青少年育成」、「青少年指導」という言葉があるように、大人が子どもや若者の成長発達に向けて育成指導するという考え方であった。

#### 4 地域の状況について

- ・町内会、青年団などは、地域を支える重要な役割を果たしてきたが、こうした伝統的な地域の組織が、地域を面的なイメージで捉え、網羅的、組織的に動かすのは難しくなっている。

### 3 3つの視点～「若者」と「地域の関わり」を考える～

#### 1 若者と大人がつながり、ともに場をつくる

##### (1) 人と人が出会う場所

人のつながりの大切さ／多世代の人が居たいように過ごせる空間／若者が大人に出会い、話を聴く場、チャレンジできる場

##### (2) 大人と若者が互いの弱さを語り、聴く

若者も大人も空間的、精神的な居場所が少ない／失敗も含めて現状のままの若者を受け止める／若者だけでなく、大人も未完成／若者と大人のフラットな関係性／傷ついたことを話し、対処する方法を身につける

##### (3) 多様な世代の交流と対話

世代を超えた者同士の対話／斜めの関係／多世代が混ざる、評価や競争のない場

#### 2 若者と大人がともに経験する

##### (1) 若者と大人がともにつくる

新しい社会を創り出す力／若者が本気で力を出す出番や機会／若者と多世代がともに考える／若者も大人も作り手側

##### (2) 若者と大人がともに学ぶ

対等な関係性／大人ができないことを自覚する／価値観の違いの共有／大人が若者に教えるという先入観／年齢に関係なく学び続ける

#### 3 若者と大人がともに進む

大人が若者の横や斜め後ろにいる役割／大人が若者を応援する姿を見せる／若者を支え、育てる人の循環

## 5 5つの提言～若者が活躍する地域づくりを進めるために～

### 提言1「地域と地域づくり」～場の創出～

- 目的がなくても人が集って語り合い、時間的、空間的にゆとりのある場で、他の人と顔を合わせることが大切である。
- 地域に様々な考え方を持つ人たちが交流できる場があることにより、若者が多様な人間関係を築き、物の見方を多元化できる機会となる。
- 今後の地域の捉え方は、様々な場や主体が相互に関わり、多層的な地域となることをイメージすることが大切である。

### 提言2「人と人をつなげる」～つながりの創出～

- 人は地域の様々な場(家庭、学校、町内会、子ども会など)で人間関係を持ち、生活している。
- 子ども、若者、大人の各世代には、それぞれが発揮する力がある。世代を超えて、地域の様々な場で、人と人の共感的な関係を育む役割を担う人材が増えていくことが大切である。
- 町内会や子ども会、子ども・若者の育成支援活動などを運営している人たちが、つながり、協力しながら多層的な地域にしていくことが必要である。

### 提言3「若者と大人が共感し合える関係を育む」～対等な関係性の構築～

- 地域づくりを進めるには、世代を問わず、一緒に地域をつくることができる関係性が大事である。若者も大人も安心して自分らしさを発揮するために、大人が若者を指導するのではなく、大人と若者が対話し、共感的な関係から対等な関係を構築することが重要である。
- 若者と大人が対話し、共感し合える機会を持つことにより、対等な関係ができ、地域づくりを進めることができる。

### 提言4「若者と大人がともに地域をつくる」～相互理解と協働～

- 若者の持つ「チカラ=社会に与える影響力」を大事にしながら、大人とともに地域づくりを進めることが大切である。
- 若者も大人も互いを理解することが大切である。若者と大人が互いの得意なことを出し合い、苦手なことを補い合いながら、相互にチカラを発揮しあうことが大切である。
- 若者と大人がパートナーシップを持ち、一人ひとりが主体的に地域づくりに関わることが求められる。

### 提言5「場づくりを担う人に求められること」～寛容な場の醸成～

- 場づくりを担う人は、その場で起こる言動や行動を良い、悪いという考え方で評価せず、ありのまま受け入れることが大切である。これにより、その場が安心して対話でき、共感できるものとなる。また、集まる人が安心できる場になるよう、時間や空間にゆとりを持たせることが必要である。
- 場づくりを担う人は、専門家ではなく、地域で地道に活動している方々である。家庭など普段の生活においても、互いを評価せず、ありのまま受け止め、共感する場をつくるよう心がけていくことが大切である。

## 4 実践検証事業

### ～若者を中心とした多世代交流の場～

- 趣旨  
実践検証事業を通し、若者の意識や実態について議論の検証を行った。
- 実施内容  
「多世代ワークショップ」を実施し、若者を中心とした様々な世代の人が集い、語り合い、共感し合える場をつくる中で、若者が日頃、自分自身や多世代、地域や社会についてどう感じ、考えているのかなどを理解する。  
日程：平成29年8月20日  
場所：湯河原リトリート ご縁の杜(湯河原町土肥)  
参加者：若者(20代)14人、大人(30～60代)20人

反映

### 行政に期待される役割

町内会や子ども会、地域住民の居場所などに参加する誰もが安心して過ごせるよう、互いを受容し、共感し合える場を構築することが重要であり、そのような共感的な関係を育む人材を育成することが必要である。

## 第1章 審議テーマ等

### 1 審議テーマの設定について

#### (1) 今期審議テーマ

「若者による地域づくりのカタチ」～若者の「チカラ」を地域の「チカラ」に～

平成 28・29 年期神奈川県青少年問題協議会においては、平成 28 年 3 月に改定した「かながわ青少年育成・支援指針」を踏まえ、青少年の成長と自立を支援する新たな施策を展開する上で、当事者である若者が主体となって大人とパートナーシップを組みながら地域づくりを進めることが重要であるとの視点に立ち、若者や、若者と大人との関係性、地域のあり方や取組みの方向性などについて調査審議を行うこととした。

#### (2) 審議テーマの背景

現代の青少年を取り巻く現状として、子どもが若者になり、大人になる育ちのサイクルの崩れのほか、少子化・核家族化の進行による家庭での子育ての孤立化や地域での人間関係の希薄化により地域における青少年を育む力が低下している。

一方で、子ども食堂や学習支援を通じた居場所づくりなど若者を支援する場を模索する動きがある。

<参考 審議テーマに関する説明図表>

【図表(1) 年齢階級別完全失業率 (P36)】

【図表(2) 大学卒業者のうち就職も進学もしないものの数及び割合 (P36)】

【図表(3) 男女、年齢階級別非正規の職員・従業員の割合の推移 (P37)】

【図表(4) かながわ子ども・若者総合相談センター相談実績から見たひきこもりの状況 (P37)】

【図表(5) 年齢階級別若年無業者の推移 (P38)】

【図表(6) 県内の青少年人口の推移 (P38)】

【図表(7) 県内の一般・核家族世帯数及び平均世帯人員の推移 (P39)】

【図表(8) 県内の一般世帯の家族類型の割合の推移 (P39)】

【図表(9) 子どもの貧困率 (P40)】

【図表(10) 居場所ごとの満足度 (P40)】

【図表(11) 子ども会の団体、指導者、会員数の推移 (P41)】

【図表(12) 今住んでいる地域の行事に参加していますか (P41)】

【図表(13) 子どもの健全育成の分野で活動するNPO法人の数の推移 (P42)】

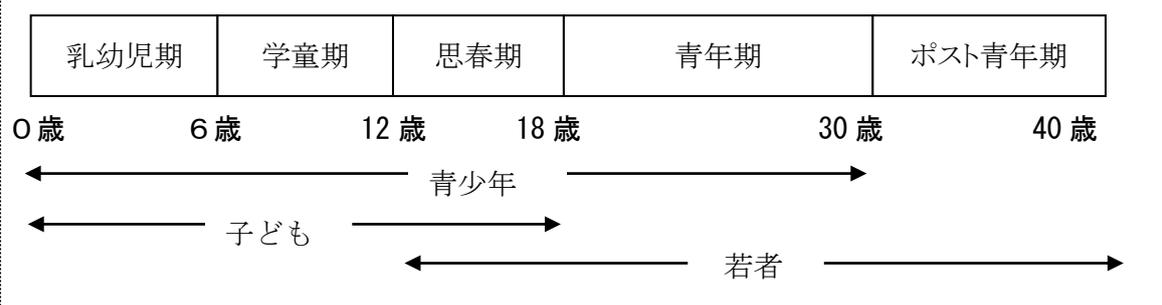
## 2 本報告書の目的・対象

- 本報告書の目的は、若者の「自立・参加・共生」を実現するために、若者が安心して地域とつながり、活躍できるよう大人との関係や地域のあり方などをまとめることである。
- また、本報告書は、若者、地域とのつながりを重視する観点から、地域で活動している方を含めた全ての県民の方に向けて、広く発信する。

### <若者について>

- 現代のライフスタイルでは、小・中学生は子ども会などを通じて地域と関わる機会があるが、高校生、大学生、社会人となった主に思春期及び青年期の10代から20代は地域と関わる機会が減る。30代は家庭を持ち始める人が増え、子どもを通じて地域と関わる機会が出てくる年代である。
- 地域をつくる上での第一歩となる社会参加に関しては、自分で役割を選択する、自分でつくることが基本となる。10代、20代は社会的役割が明確ではなかったり、固定化されていないことが多いため、社会参加に関し、自由な選択をしたり、自らが創り出すことが可能である。30代になると家庭を持つ、会社で役職につくなど社会的役割が固定化され、社会参加に関して自由に選択することが狭まってくる。
- 本報告書が対象と考える若者は、地域と関わる機会が少なく、社会的役割が固定化されていない思春期及び青年期の10代から20代を想定している。なお、30代については、再び地域との関わりが多くなる年代であることから、主体的な地域づくりへの参加が期待される。

#### 【参考：「かながわ青少年育成・支援指針」における青少年等の考え方】



### 3 協議の経過と本報告書の構成

- 本協議会企画調整部会では、平成 28 年度に全部会委員が、各自の専門的見地や取り組み実績を踏まえた意見発表を行い、発表内容及び意見交換の概要をまとめた。
- また、平成 29 年 8 月に実践検証事業として「多世代ワークショップ」を実施し、若者が日頃、自分自身や他世代、地域や社会についてどう感じ、考えているのかなどについて議論の検証を行った。
- これらの経過を踏まえて、本報告書は、以下の構成となっている。

#### 第 1 章 審議テーマ等

…審議テーマ設定の背景や本報告書の目的等を示した。

#### 第 2 章 4 つの論点～若者と地域の現状と背景～

…若者や若者と大人・地域との関係などの現状と背景を整理した。

#### 第 3 章 3 つの視点～「若者」と「地域の関わり」を考える～

…若者と大人の関係やそれぞれの役割など、若者と地域の関わりを考える上で重要な視点を整理した。

#### 第 4 章 実践検証事業～若者を中心とした多世代交流の場～

…実践検証事業として「多世代ワークショップ」を実施し、若者を中心とした様々な世代の人が集い、語り合い、共感し合える場をつくる中で、若者が日頃、自分自身や他世代、地域や社会についてどう感じ、考えているのかなどについて議論の検証を行った。

#### 第 5 章 5 つの提言～若者が活躍する地域づくりを進めるために～

…今後、若者による地域づくりを進める上で大切にしたいポイントを提言としてまとめた。

## 地域とは何か ～4つの視点～

### ①生活の場

生活していく中での色々な悩みや苦しみ、希望や喜びが生まれる場であり、生活に密着した様々な課題が生成される。地域の人々は、生活者として、現実におかれた条件の下で課題に対処することが求められる。



### ②現実そのもの

メディアや仮想の世界が広がる中で、地域で生活するという事は、逃げる事ができない現実の中で行われる。それゆえ、対面でのコミュニケーションや実際の付き合いが大事にされなければならない。地域での経験の積み重ねが、社会生活を営む上での行動や意思決定に重要な意味を持つが、これは必ずしも合理的なものではない。

### ③文化を維持創出させる場

地域では、生活上の慣習や従来からのやり方といった生活文化が、人々の意識や行動の多くの部分を規定している。それは、情緒的な、合理的ではない判断が重視されることにもつながるが、それらの積み重ねにより信頼関係が生まれるという面もある。近所づき合いのように、地域には助け合いや支え合いの原点がある（「お互いさまの関係」の重要性）。

### ④人間関係のかたまり

地域とは、家族、近所づき合い、町内会、同級生の集まりやサークルなど、様々な人間関係のかたまりといってもよい。家庭や会社は、基本的に同質的な集団でいわば閉じており、多様な関係が形成されにくくなっているが、異質な関係性が複合的に入り混じっているのが地域であり、タテ・ヨコ・ナナメの関係がたくさん創出される可能性も持っている。閉じた世界にいる子どもたちを、そうした場に解き放ってあげることが大切である。

出典「平成 24・25 年期神奈川県青少年問題協議会報告書「地域で深める親子の関わり」～子どもを中心につなごう！地域と親子～」

## 第2章 4つの論点～若者と地域の現状と背景～

第1章で設定した審議テーマを検討する上で、若者や、若者と大人・地域との関係などの現状について4つの論点から整理する。

### 1 若者の「チカラ」について

- 若者には、これまで学校教育の中や、企業に就職する際など、大人や社会が必要と考える能力を身につけることが期待されてきた。大人は、若者が社会で通用する人材になるための様々な能力を分析、抽出、一般化して「知識や情報を活用する能力」や「コミュニケーション能力」などに細分化してきた。そうした能力を若者に身につけるよう求め、それらを個人の能力として測定し、評価してきた。
- 一方で、人には生活や人とのやり取りの中から自ずと身につける力がある。例えば、「普段はおとなしい若者が小さな子どもと接するとき力を発揮する」、「いつも物静かな若者が人の話を聴く力に長けている」といったことは、生活の中で発揮されるものである。
- 生活の中で誰と一緒に何をするかということが、とても大事である。他者との関係の中で起きるアクシデントなど、様々な場面に対応していくことが生きる力となる。
- 審議テーマの副題「若者のチカラを地域のチカラに」にある「チカラ」は、大人や社会が、若者が身につけるべき力として抽出、一般化した力・能力に対し、生活する中で自然と身につけ、具体的な状況や関係性の中で発揮される「チカラ」と捉える必要があるのではないか。こうした「チカラ」は、若者の存在自体が大人や社会に与える「影響力」と表現でき、若者による地域づくりを考える上で大切にしていけるべきではないか。

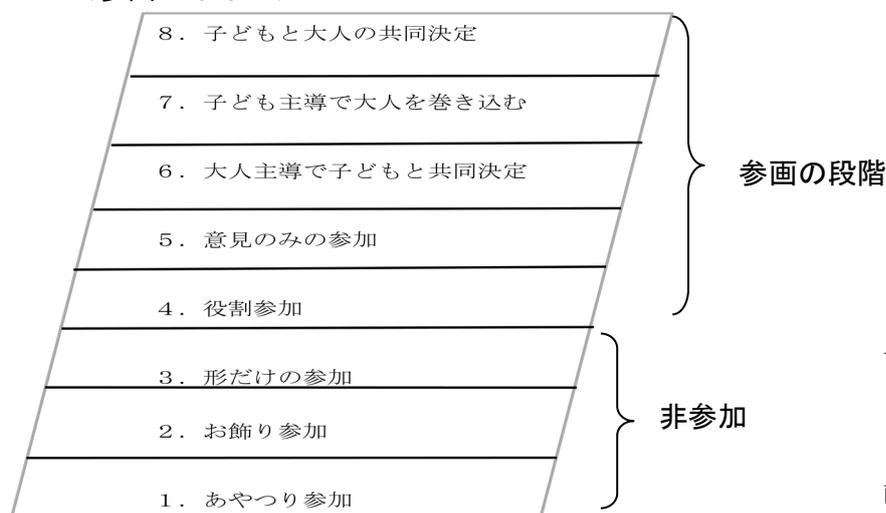
### 2 大人と若者の関係について

- 今、若者が出会う大人は、親か、学校や塾の先生くらいで、若者が多様な年代の大人に出会うことが少なくなっている。世代間の関わりが減っている中、大人と若者の信頼の絆は育まれにくくなっている。
- 若者が、弱さを出したり、弱さを共有できないことが、大人との信頼や寛容できる関係をつくる上で障壁となっているのではないか。失敗や挫折を繰り返し、深く傷ついて生きてきた若者の経験を共有してくれる、じっと話を聴いてくれる誰かが必要なのではないか。
- 世代間の関係が希薄になっている中、地域づくりを考えるには、もう一度多世代が安心して出会い直す、関係を結び直すことが必要ではないか。大人と若者がお互いを受け止め合い、対話し、パートナーとなれる場が必要ではないか。

### 3 若者の参画について

- 大人と若者の関係性については、「青少年育成」、「青少年指導」という言葉があるように、高度経済成長期頃まではその時代背景と連動しながら、大人が子どもや若者の成長発達に向けて育成指導するという考え方であった。
- 1980年代に入り経済が低成長の時代になって以降、子ども会など伝統的な青少年団体の会員数が減少し続けている。これは、少子化による影響のみではなく、低成長により、頑張れば明日はもっと良くなるという生活実感がない中で、大人の育成指導により若者を成長させるという旧来の考え方が現実から乖離してきているとも考えられる。こうした中、育成指導から若者を支援するという考え方「青少年活動支援（ユースワーク）」への転換が必要となっている。
- 若者と大人との関係性を見直す上で、社会参加における子どもと大人の関わり方を8段階で示した「参画のはしご」というフレームワークを手がかりとして考えることができる。これは、子どもの社会参画の段階を分かりやすく「はしご」にまとめたものだが、若者にもあてはめて考えることができる。大人と若者の関係性について上の方にいくに従い、パートナーシップを組んでいく対等な関係性になっていくことを示している。きっかけとして「1 あやつり参加」や「2 お飾り参加」があってもよく、ひとつの実践の場でも「1 あやつり参加」から「8 子どもと大人の共同決定」まで行ったり来たりすることがあり、一概に「8」がすべて良いわけではないことには留意する必要がある。
- 「4 役割参加」は大人が若者に役割を与え、役割の意味を伝える。「5 意見のみの参加」は大人が主導し、若者は意見だけを言う参加となり、「6 大人主導で子どもと共同決定」は大人が主導だが、若者と一緒に意思決定をする段階となる。「7 子ども主導で大人を巻き込む」では、若者が発案し大人を巻き込む、「8」は若者と大人がパートナーシップを組み、対等な関係性になる段階である。参画の経験がない若者を後押しし、大人が計画づくりのきっかけをつくることは必要であり、大人は若者の意思を尊重し、任せることも大切である。

#### <参画のはしご>



子どもの参画のはしご図  
ロジャーハート  
『子どもの参画』  
萌文社、2000年より作成

## 4 地域の状況について

- 町内会、青年団などは、地域を支える重要な役割を果たしてきた。一方で、都市化した地域では青年団の活動が活発ではなく、青年団がない地域も多く見受けられるようになった。
- こうした現状のもと、町内会などの伝統的な地域の組織が、地域を面的なイメージで捉え、網羅的、組織的に動かすというのは難しくなっている。また、若者世代が、町内会などの既存の組織に入っていくと感じているのではないか。
- 一方、住んでいる地域でつながるコミュニティとは別に、興味や関心のあるテーマでつながるコミュニティがあり、近年はインターネットやSNS（ソーシャル・ネットワークワーキング・サービス）<sup>1</sup>などのメディアにより地域を越えて人々がつながっている事例もある。
- 今後は、町内会など伝統的な組織を含め、多世代に開かれた小さなコミュニティがお互いに緩やかにつながり合いながら、多層的にネットワークを組むといった地域のイメージを持つ必要があるのではないか。

---

<sup>1</sup> 社会的（ソーシャル）なネットワークを仮想空間であるインターネットを介して構築するサービス。LINE、Twitter、Facebook 等。

## 参考コラム

### <ケーススタディ①：コミュニティカフェを活用した若者によるまちづくりアクションプラン> (第1回・萩原部会長)

- 世田谷区の商店街で、大学生たちが未就園・未就学児のお母さん達のコミュニティカフェを舞台に、子育て支援NPOとまちづくりに取り組んだ事例がある。
- 「日中は子育て支援をやっているが、夕方や夜、週末は空いていて使っていない、もったいないから何かやらないか」という話を受け、学生たちがプレゼンし、それを地域の方、NPOの方たちにも見ていただいて「この企画はいいね」というものを一緒に取り組んだ。
- いくつか実際にやったものを紹介すると、子育て中のお父さんたちのサークルとの「子育てパパとのトークバトル」や、ゴジラを制作された監督からゴジラが街を壊すという目線から、防災とか防火という街のことについてお話いただく「ゴジラをとおしたまちづくり」など、大人ではなかなか出てこない発想があった。
- 夜は居酒屋タイムで、学生たちが厨房に立って、連れて来られた赤ちゃんの見守り保育を学生たちがやるなど、その間は、お母さんたちが自由におしゃべりできるスペースを作った。
- 気がついたら、学内では非常に寡黙な学生が大変上手に赤ちゃんを抱きかかえていた。弟や妹をあやしていた経験があるということだった。学生がひよいと抱き抱え泣きもせず活発に動いているのを見て、お母さんが逆に「ちょっと寂しい」といった子離れ経験をした。このように人工的、意図的ではない、偶発的な出会いの中で、多世代がお互いの力を見つけ出すというような瞬間に立ち合えたという事例があった。
- また、高齢化が進む世田谷の商店街で、学生たちが自らの発案により、地元の消防団から打ち木を借りて、商店街を練り歩きながら「火の用心」をやった。そうしたところ、どのお店からも店主が出てきて「ご苦労様」と声をかけてくれた。街中に入って動いたことによって街も動いたということを若者が実感した。
- 「地域づくり」や「地域活性化」というと、経済的な側面ばかりが着目されがちになる。若者が参画していくことによって、人と人とが見えない形だけでも、関係が動いて、心の交流というものが動き出すということが可能性として見えた。

### <ケーススタディ②：「ゆがわらっこことつくる多世代の居場所」> (第2回・山田委員)

- 慶應義塾大学と湯河原町が「未病に取り組む多世代共創コミュニティの形成と有効性検証」として、RISTEX（社会技術研究開発センター）に採択され活動している。居場所は、平成28年11月から始まった。
- その中で「コミュニティ班」では「ゆがわらっこ」という、湯河原の子どもを中心にした、多世代の居場所をつくっていきこうという活動をしている。
- ワークショップでは、安心できる場所とはどんな場所かということを中心にみんなで話し合いながら、リノベーションを行うなど、居場所づくりに取り組んでいる。

【参考情報】「ゆがわらっこことつくる多世代の居場所」所在地：湯河原町町中央3-2-11  
(<https://www.facebook.com/yugawara.tasedainoibasho/>)

## 第3章 3つの視点～「若者」と「地域の関わり」を考える～

第2章で4つの論点から整理した現状に対し、「若者」と「地域の関わり」を考える上で重要な3つの視点をまとめる。

### 1 若者と大人がつながり、ともに場をつくる

#### (1) 人と人が出会う場所

- 地域の中には、人と人が出会う場所が必要である。まちづくりや地域づくりでは「生きがい」、「つながり」、「活動」が必要である。他者との温かい関係、互いに尊重し合える関係があるから生きている実感、生きがいを得られる。人との関係が十分にできると生きる意欲が湧き、新しいことを始めたいと思う。それが地域の様々な「自発的な活動」につながっていく。社会にはまだ、生きる喜び、活動の意欲につながるような出会いの場が少ない。
- 町内会などフォーマルで組織的な地域も基盤として大切であるが、今後はインフォーマルな「共」の生活、インフォーマルな人のネットワーク、人のつながりを大切にしていく視点が必要である。

昔は一人ひとりが、家の外でも子育てや見守りをしていたが、現在ではそうした機会が少なくなり、近所付き合いの難しさなども生じている。
- 子どもから大人まで様々な年代の人が、いつ来ても帰ってもよく、それぞれが、居たいように過ごすことができる空間の中で、1回や2回はお互いに接触できる機会がある場が、その人の居場所となる。
- 若者には、やりたいと思っていることを実践している大人に直接出会い、話を聴く場やチャレンジできる場が必要である。例えば、大学生の就職活動は、イベント的に決めるのではなく、多様な人と出会い、やりたいことをやっている人に直接話を聴くことが大切で、そうした場が必要である。

#### (2) 大人と若者が互いの弱さを語り、聴く

- 今の地域には、若者も、大人も空間的な居場所や精神的な居場所が少なく、つながりが希薄になっている。特に若者には、自分が必要とされていない感覚を抱くことが多く、何をしても、何もしなくても、自分という存在を認めてもらえる居場所が必要である。
- 社会から認められていない、求められていない、失敗は許されないといった思いを持つ若者が、誰かに「ダメはダメでよい」と現状のままの自分を受け止めてもらえることが大切である。
- 絶望等からつまずき、挫折したマイナス感情を持つ若者は、いつも周囲から「頑張れ」と前向きなアドバイスをされ、プラスの感情に変えるよう叱咤激励されながらひきこもるといったことがある。こうした若者には、一時的に逃げる場や時間が

必要で、失敗も含め、ありのままの若者を認める大人が必要である。

- 若者には、周りから自分の存在を大切にされる経験が重要で、単純に話を聴いてもらうだけで若者にとってはエンパワメントになる。
- 「失敗は成功のもと」というように、失敗を成功に転化するためには、自分の経験を振り返ることによって、失敗を超える「メタ概念（こうすると、こういう自分になる）」を自ら作ることが大切である。若者だけではなく、大人も未完成な部分があることから、若者と大人と一緒に、失敗したことを熟考し、振り返りができるフラットな人間関係をつくることが大切である。
- 最近、若者を中心に Twitter、Facebook、LINE やメールといったメディアを駆使して、情報発信し合うようになり、その結果、人は他の人から様々に評価されるようになってきている。顔と顔の見える関係ではなく、自分の想像だけで相手の言葉を解釈することになり、落ち込んでいるときに読むと非常に傷つく言葉として受け止めることがある。こうした際に対処できるよう、傷ついたことを信頼できる大人に話し、その方法を身につけることが大切である。

### (3) 多様な世代の交流と対話

- 近代の思考は目的志向で、「目的を決め、そこにいかに効率的に向かっていくか」という意識が強かった。世代間に目的意識の違いがある中で、目的志向だけではなく、世代を超えた者同士で対話をするのが大切であり、その対話の場を誰が取り持つのが大切である。実の親や兄弟姉妹でもない「斜めの関係」でいられるような第三の誰かが間を取り持つことが考えられる。
- 例えば、大家族は、祖父母をはじめとして多世代による色々な物の見方があり、一元的にこれが正しいといった規則性やルールが成立しえない場である。物の見方が多元化することは大切であって、様々な年代の人が混ざり、対話できる、評価や競争のない場が必要である。

## 参考コラム

### <ケーススタディ③：グリグリ・プロジェクト>（第2回・坂倉副部長）

- 「グリグリ・プロジェクト」という、廃校になった中学校の校庭に畑を作ってみんなで野菜を育ててアーティストと一緒に遊んだりする活動がある。
- 校庭に畑を作るところから始まったが、それが結果的によかった。本当に何もなかったが、そのうちに、子どもが「子ども用の畑がほしい」と言い、大人が触らせてもらえない畑が勝手にできたりした。
- バラを植えたいという意見も出たが、「トマトは1年かからずにできるけど、バラは何年もかかるからきっと無理だろう」と言っていたが、それが2年、3年と続けるうちに、今ではバラのアーチになった。
- ちょっとずつ実現していく場、1年のプロジェクトでは絶対にできないことが、何年もやっているといつかはできる。「夢は絶対叶うんだ」という大人たちによって長続きをしている。
- 植物を育てるといいと感じた。都会で暮らす大人は自分が考えた計画どおりに物事を進行させたい。そこで苦しんだりストレスを感じたりする。植物は自分たちの都合では育ててくれない。これはしょうがない、なる時にしかならない、という自分たちの力の及ばないものに付き合うと、寛容な付き合い方が都会の中でも生まれてくるのかなということも思った。

【参考情報】「グリグリ・プロジェクト」（平成28年7月事業終了）

（特定非営利活動法人 芸術家と子どもたち <http://www.children-art.net/action/>）

### <ケーススタディ④：芝の家>（第2回・坂倉副部長）

- 行政と大学の協働で運営されている地域の居場所「芝の家」は、0歳から80歳近くまで、子どもは遊んだり、大人はおしゃべりをしたりお茶を飲んだり、同じ空間の中で、居たいように、過ごしたいように過ごしている。
- そういう環境、小さい居場所でお互い接触する機会がある関係が、その人にとって本当ではないか、人間の精神的安心感ということでもとても大事なのではないか。
- そのうちに、いろんなやりたいことが出てきて、「アレをやりたい、コレをやりたい」といろいろなイベント（町内会の会長さんのレコードコンサート、お琴のコンサート、落語の会など）を、スタッフ、子どもたちや町内会の人たちが、自分たちでつくって自分たちで楽しんでいる。
- さらに、1年半くらい経ったときに、活動がたくさん生まれるようになった。1、2ヶ月だとできないが、1年位やり、地域にネットワークができてくると、とたんに活動が始まる確率が高まった。
- 「芝の家」では、子育て中のグループの人たちが、近所のおばあちゃんに刺繍を教えてもらっている。子どもは別の人がみてくれて、自分はいろんなことを教えてもらえて喜んでいる。「斜めの関係」が生まれている。
- お母さんたちが、近所の人たちに親切にしてもらった経験をしていれば、子育てが一段落したときに、きっと新しく子育てをしている人に同じように親切にしてくれるのではないか。親切が再生産されていくのではないか。お互い様というのを10年、20年というスパンで地域の居場所で次の人たちに引渡していくことなのではないか。
- 大学生が「芝の家」に来て、「いいところだけど、昼間は学校に行っているからなかなか来られない。夜空いていたら来られる」と、金曜日の夜に「夜芝」といって、みんなでご飯を作って食べる会を1年間、ほとんど毎週のようにやっている。

【参考情報】「芝の家」慶應義塾大学・港区芝地区総合支所協働運営

所在地：東京都港区芝 3-26-10 (<http://www.shibanoie.net/>)

## 2 若者と大人がともに経験する

### (1) 若者と大人がともにつくる

- 「何も教えてもらわなかったから」、「マニュアルがなかったから」と学校や仕事を辞める若者がいる。自分たちで「何かを創り出す」、「クリエイトする」ことが大事で、そうした経験から、いろいろな成長過程を育むことが大切である。
- 「遊び」という誰にも平等にあるべき体験をパッケージ化し、人数を限定してお金を取るというものがあるが、そのような仕組みとは別に、子どもであってもクリエイティブな体験をして夢をかなえる、ワクワクすることが必要である。
- 農業など植物を育てることは、自分たちの都合通りにはならない。どんなに気持ちやお金をかけても育つとは限らず、どんなに手をかけても台風などの天候で上手くいかないことがある。これまで、人間は人の力を超える自然と折り合って生きてきた中で多くの知恵を育んできた。不確実性が高まる現代社会で、改めて人との信頼や寛容さ、寄り添うこと、人の弱さなど人間のありようを捉えなおし、若者と大人の関係や育ちのありようを問い直すことが大切である。
- 若者には、本気で力を出すような出番や機会が必要である。自分が働きかけたら地域が動く、地域を変えられるという成功体験や、動き出すと何かが変わるという手ごたえを、いかに一人ひとりが持つのが大切である。
- 若者は様々なチカラを持っていて、年下の世代にロールモデルのような形で影響力を発揮することができる。また、SNSなどのメディア技術の仕組みを作っているのは、20代から30代の若者が多いことから、若者は新しい社会を創り出す原動力を持っている。
- 若者も大人も一緒に意見を言い合い、合意できる場所を探して実行してみたらこれまでよりも良くなったといった経験をすることが大切である。多様な世代の人と一緒に考えて、より良い環境を作っていくことが大切である。
- 誰かがやってくれるということではなく、若者、大人、誰もが、作り手側だという感覚が必要である。一人ひとりが、小さな改善の担い手となるような社会になっていくことが大切である。

### (2) 若者と大人がともに学ぶ

- 例えば、普段は頑張れと言っている大人が子どものサッカーチームに入ると、子どもは自分よりできない大人に頑張ると言えることがある。大人が自分でもできないことを自覚して、子どもたちと一緒にできるようになることは、対等な関係性、パートナーシップをつくることになる。
- 価値意識の違う世代が連携・協働・コラボしていく観点が必要である。現状では大人世代が若者世代に価値観を押し付けることが多い。大人側が世代間の違いを理解する寛容さを持ち、各世代の価値観の違いをうまく共有する、相互理解をしていくことが必要である。

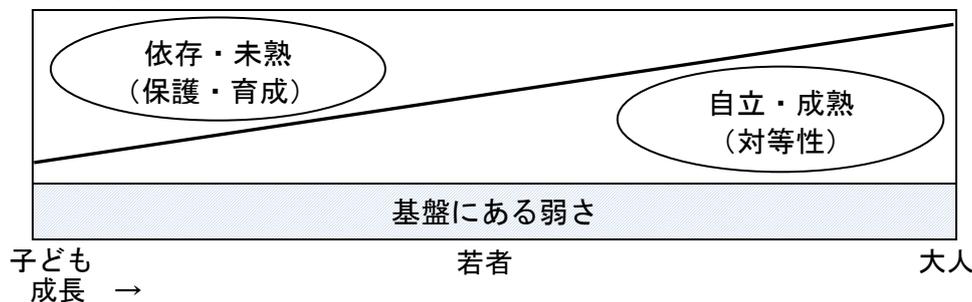
- 子どもは学ぶべき存在、教えられるべき存在であり、大人がそれを教えるという先入観がある。子ども時代に集中的に学び、学校を卒業し、それをもとに仕事をして一生を送るという考え方によるものだが、何歳になっても謙虚に学び、未完成のままであるが一步でも二歩でもより良いものにしていく、年齢に関係なく学び続けていくことが大切である。

### 3 若者と大人がともに進む

- 大人には、大人が若者をゴールまで引っ張り、同じ経験の若者たちを生み出すという旧来の役割感で若者と関わっていることがある。大人が価値観を転換し、一緒に横にいる、少し斜め後ろにいるなどの役割を担うことが必要である。
- 若者が集まって自分たちがやりたいことをやり、一人ひとりが違う学びを得る。それを見守り、一緒に共感してくれる大人のネットワークがあるとよい。見守るだけでは不安という大人の葛藤や感情を含めて、一緒に話せる場、みんなで見守るという体制や環境が大切である。
- 若者による地域づくりを全国的にみると、地方には青年団が元気に活動する地域がある。過疎化、高齢化が進んでいるが、地域おこしをしようと頑張る若者たちがいて、青年団の先輩たちのつながりから信頼され、地域から期待されている。一方で、都市化が進む首都圏においては、伝統的な地域共同体が崩れてきているという現実があり、地域に何もつながりのない若者がどのように地域とつながりを持つのかという課題がある。若者を応援する人がいる場が大切で、地域の大人が若者を応援する姿を見せることが大切である。
- 地域がどう若者を引きこむかではなく、地域の大人が若者のチャレンジを支えることが大切である。若者が自分たちを応援する大人の存在に気づくと、大人になったときに、同じように地域で若者を支え、育てる人になっていくという循環が生まれる。

#### 参考コラム

##### <若者と大人の関係性>



子どもが0歳から始まり、若者になり大人になる中で、人間が学び、育つというダイナミズムを捉えると、大人と子ども・若者の関係性は変化する。また、常に若者も大人も共通の基盤として弱さを抱えている。若者と大人の関係では、全てが対等で平等というパートナーシップを大事にしなければならない一方で、大人側の責任があやふやになる一面も生じる。若者は、大人との関係の中で、保護・育成する観点では依存性が高い。ある程度、大人が若者をサポートしていかなければならない部分が残ることを考慮する必要がある。

## 参考コラム

### <ケーススタディ⑤：山下少年サッカークラブ>（第3回・村田委員）

- 「山下少年サッカークラブ」は、幼稚園・保育園児から小学校6年生までの約100人が所属している。
- 2年前に地域から「音や声がうるさい」「危険だからボールを使わないで」との声が寄せられた。
- 子どもたちが消極的になってしまったため、活動の最初にレクリエーションの時間を取り入れたところ、大人にも好評で、偶発的に大人と子どもが混ざる活動が始まった。
- 町内会長の理解も得たことで、地域を絡めた活動が増えていく形になり、地域に応援してくれるファンがすごく増えた。
- 元々このチームで活動していた大学生が手伝いにきてくれるようになり「自分の居場所を見つけることができた」と話していた。
- 普段交流することのない様々な人が一緒に空間にいることによって、自然とコミュニケーションが生まれた。一緒にここにいるということがすごく大きい。
- 子どもと大人が混ざることで相互理解が生まれ、大人の側に子どもを見守る姿勢ができてきた。
- 子どもがクラブに参加していない大人でも、この活動を応援してくれている方々が試合を見に来てくれるようになった。
- 校長先生からの提案で、6時間目が無い水曜日の放課後、大学生が中心となり子どもたちに遊びを提供する仕組みを作ることになった。
- 新しいつながりがいろいろなところで生まれて、それが広がっている。

### <ケーススタディ⑥：グラウンドワーク三島>（第2回・笹井会長）

- 「グラウンドワーク三島」は「水の都三島」といわれた自然環境が豊かでクオリティが高いまちを再生しようという地域づくり活動で、国土交通省の都市計画大賞や、新聞社が行った地域再生大賞を受賞するなど、評価の高い活動である。
- 地元の団体が小川を掃除したり、川沿いに遊歩道を作ったり花を植えたり、まちぐるみで、きれいな町並みを再生しようということを行ってきた。
- 親分が上から目線で市民をガバナンスするという形ではなく、青年会議所や地元の町内会、ボランティア団体、NPO、商工会議所、行政も対等な立場でネットワーク型の組織、連合体を作っている。
- 実践的活動を充実することに重点を置き、アクションプランを策定。何をすればいいのかということが年度毎に明示され、活動成果、パフォーマンスの成果を情報発信し、自分たちの充実感、共感の輪も広がるなど、アウトカムをプロモートしている。
- 最近では、環境コミュニティビジネスで、地元の安全・安心な蕎麦を作って売る、カフェをやっているいろいろな食べ物を販売するなど、どんどん広がってきた。
- なぜ成功してきているのか。ひとつは「環境」という切り口である。自然環境の保全の問題で、多種多様な切り口があって、市民がくっつきやすい。単一のイシューではなくて、マルチのイシューなので、いろいろなところからアプローチが可能だということで、「私はここに協力する」ということが可能になっている。また、個々の団体で自己完結せず、補完的な関係ができるようになってきている。議論、協議を重視し、お互いにやってくれてありがとう、という関係になるようにしている。

【参考情報】 特定非営利活動法人 グラウンドワーク三島  
(<http://www.gwmishima.jp/>)

## 参考コラム

### <ケーススタディ⑦：NPO 法人 PIECES>（第2回・宮島委員）

- 10代のお母さんたちの勉強の場をつくるなどしている NPO 団体である。実際に活動の中心になっているのは、高校時代からホームレス支援をやっていた若者である。一度就職に失敗をして、今の活動を始めたということである。
- ここでは、10代の若い人たち、特にハイリスクの人たちの支援ができないかということで、不登校であったり、高校を中退してしまったり、若くして母になった人たちに学びの場を提供したり家事の手ほどきをしたり地域につなげる活動をしている。
- やりたいことをオーダーメイドで、みんなで作って一緒に楽しんでいる。
- 活動を支えているのが大学生たちである。大人が子どもに一方的に支援するのではなく、同じ世代同士でできることはやってみようと、「コミュニティユースワーカー」という制度を今年から始め、伴走者として子どもたちのニーズを聞いたり一緒に楽しんだりするようなことを仕掛けている。

【参考情報】 特定非営利活動法人 PIECES (<http://www.pieces.tokyo/>)

### <ケーススタディ⑧：ファイアースペース>（第2回・宮島委員）

- 川崎の大きな商業施設の真裏にある古い雑居ビルを改装して、屋上でビジネスをやっている若者たちがいる。
- いろいろな人をいろいろな人に出会わせることで、異文化同士の出会いを提供する場となっている。
- バーベキュースペースとして貸し出したりもしているが、学生たちが集まる場所にもしている。春には、就職活動中の学生に休憩場所として提供し、いろいろな大人を呼んで話を聞いてもらったり、語り合ったりしている。
- また、近所の親子連れもやってきて、ママカフェのようなことをやっている。
- 主宰する若者は、自分のやりたいことをやっている人と出会える場であったり、チャレンジをする場にしたいと語っている。

【参考情報】 株式会社ファイアースペース (<http://fireplace.co.jp/>)

### <ケーススタディ⑨：「広島県・尾道市立美木中学校～腐葉土」>（第3回・田中委員）

- 40年前から PTA の方たちが学校運営の足しにして欲しいということで腐葉土を作り始めた。
- その活動をもとに「起業家教育」として、中学校で模擬会社を立ち上げ1年生みんな商品開発をして腐葉土を売るという取組みが始まった。
- 地元の企業もマーケティングを一緒に手伝うなど、地域の農業系の人たちや、企業系の人たちが協力して、地域の伝統として受け継がれている。

## 第4章 実践検証事業～若者を中心とした多世代交流の場～

第3章の視点から、若者と地域の関わりを考える際には、若者と多世代の関わりが重要であることが示された。実践検証事業では「多世代ワークショップ」を実施し、若者を中心とした様々な世代の人が集い、語り合い、共感し合える場をつくる中で、若者が日頃、自分自身や他世代、地域や社会についてどう感じ、考えているのかなどについて議論の検証を行った。

### 1 実施概要

#### (1) 開催日

平成29年8月20日（日）10時から17時

#### (2) 会場

湯河原リトリート ご縁の杜（湯河原町土肥）

#### (3) 参加者

ファシリテーター 合同会社CCC 由佐 美加子氏

若者世代（20代）14人

大人世代（30代～60代）20人

#### (4) 実施内容

##### ア 実施目的

若者と多様な世代が集う「多世代ワークショップ」において、参加者が安心して語り合うことができる「場」をつくり、若者・大人の意識や実態を理解する。

##### イ 実施の流れと内容

###### (7) 導入

①形態 参加者全員

②内容

呼ばれたい名前（ニックネーム）、どのような気持ちで今ここにいるのか、今日の場への想いをシェア（共有）する。

③ルール

発言する順番は決めずに、話したい人が発言したいタイミングで話す。

④参加者発言・感想など

参加者の多くが、「何をやるのかわからないけれど、多世代でワークショップをすることに惹かれてやってきた」という趣旨の発言をしていた。



#### (イ) ペアワーク

①形態 2人1組で話し合い、その後に2組でペアワークの振り返り、参加者全員でシェア

##### ②内容

- ・参加者全員がサークルになっている状態から、対角線上にぶつかった人とペアになる。ペアは面識がない者同士である。
- ・ペアワークは、会場の外を散歩しながらなど、2人で40分間「私の最大の情熱」と「私の最大の葛藤」について語り合った。
- ・ペアワークの振り返りとして、二組で、ペアワークでの体験や感じたことをシェアした。④何が起きていたか、⑥何を感じたか（頭で処理したことではなく、ハートで感じていることを分かち合う）、③気づいたこと、発見したことを1人ずつ順番にシェアし、どんな空間（場）が2人の間にあったのか、その理由について4人で話し、探求した。
- ・振り返り後に、参加者全員でシェアをした。

##### ③ルール

ペアワークでは、相手の話を評価することなく、傾聴することがルールとされた。理解するために質問することは可とされた。

##### ④参加者発言・感想など

自分の所属やバックグラウンドに関係なく、初対面の人に情熱と葛藤を話せたことが不思議だった。聴いてもらえて嬉しいし、安心できたといった発言が多かった。

##### ⑤ファシリテーターのコメント

人は知らないと本音を言えない、話し合えない、わかりあえない、それは本当なのかという問い直しが必要である。ペアワークの意図は、この場では、みんなが本当のことを言っても大丈夫だという場を作ることにあつた。



#### (ウ) 年代別ワーク

①形態 20代、30代、40代、50・60代の年代別グループで話し合い

##### ②内容

- ・年代別に分かれて、以下の問いを各グループで模造紙に書く。
  - ④自分たちの世代が大切にしたいこと、⑥社会への願いは何か、③どんな役割があるか、⑤恐れ、不安は何か。
- ・年代別ワークの内容を他の世代にシェアした。

③ワーク結果については、21ページ1(5)アを参照。

## (エ) 多世代ワーク

①形態 各年代が混成したグループで話し合い

②内容

- ・テーマ「多世代で、世代の多様性が分断（反発や抵抗）ではなく豊かなリソース（資源）として溶かし合うには何が必要か」について話し合った。
- ・グループごとに話し合った結果を発表しあった。

③参加者発言などについては 23 ページ 1 (5) イを参照。



## (オ) 1日の振り返り

①形態 参加者全員

②内容 「今、あなたの胸に浮かぶ問いは何か」を参加者全員がサークルになり、シェアした。

③ルール

発言する順番は決めずに、話したい人が発言したいタイミングで話す。

④参加者発言などについては、23 ページ 1 (5) ウを参照。

## ウ ワークショップ事前準備会

多世代ワークショップの事前準備として、ファシリテーターの由佐氏から、安心できる場を作る際に、ファシリテーターが留意することなどについてお話を伺った。

実施日：平成 29 年 8 月 19 日(土)10 時～17 時

場 所：ゆがわらっことつくる多世代の居場所(湯河原町中央)

参加者：青少年問題協議会企画調整部会委員、若者とともに場作りを実践している方など



## (5) ワークショップ結果概要

### ア 年代別ワーク結果

#### ○ 20代グループ①

項目	内容
大切にしたいこと	可能性をつぶされない、仕事とプライベートのメリハリ、価値を生む、やり切る
社会への願い	制限されない、挑戦を助けてくれる、多様性を受け入れる、下の世代が幸せになる、選択肢が増える
役割	新しいコミュニティをつくる、挑戦できる（変えられる）、上の世代と下の世代の両世代にアクションを起こせる
恐れ	知らない、経験がない、不安がない（これが良くないことも。実際行動した時に従来のやり方に染まる可能性もある）

#### ○ 20代グループ②

項目	内容
大切にしたいこと	お金よりも自分が楽しめていること、健康、経験、大切な人と過ごす時間、人と関わること
社会への願い	平和（ほんわか暮らしたい）、世代間ギャップを取り払いたい（若いとなめられる）、人の個性や人の意見を許容できる社会に、取り繕った許容や受容（制度づくりなど）ではなく本質的に多様性が認められる社会に→就活は個性 or 同調
役割	今変えたい想いが変わることを見届けるまで働ける世代（変えたいと思ったことを変えられる）、まだ固定概念が少ないからこそ社会を変えていける
恐れ	失敗（挑戦することへの恐れ）、先が見えないこと（何も見えない、どうなるか分からない、対策をたてられない）、死

#### ○ 20代グループ③

項目	内容
大切にしたいこと	自分に正直、自分の心に従う、自分の可能性を否定したくない、できないからチャレンジしないのはダメ（やって後悔、失敗を恐れない）、チャンス・出会いを大切に
社会への願い	環境によって左右されることへの憤り、挑戦する機会を与えられる（幸せの方向の多様性を認められる環境へ）、やりたいことが受け入れられる（日本と海外を比較して顔色を伺わない）、人との出会いをたくさん
役割	社会の当事者である意識を持って生きていく、世の中へ発信していく（50年後の世界をどうしたいか）、もっと若者は大人（年上の人）に頼るべき、つながりを作る、色んなことを経験して成長する
恐れ	年金（先が見えない）、ロールモデルが40歳代止まり、第1人者として生き方を（どの時代も？）、結婚できるか、何が幸せか（働き方の変化）

○ 30代グループ

項目	内容
大切にしたいこと	家族（誕生と死）、人と人や自然とのつながり
社会への願い	安心して生活できる社会、次世代の子どもたちが自分のやりたいことができる社会、誰もがチャレンジしやすい社会（やり直しができる社会）、失敗を受容できる社会
役割	社会への願いを実行する・発信する、つなぐ役割（先祖・祖父母と子どもたち）
恐れ	視野が狭くなる（自分の能力、スキル、経験のため）、安全圏で動こうとする、キャリアシフト、次の生き方を考えたいけど...

○ 40代グループ

項目	内容
大切にしたいこと	人類愛、家族、人を育てる、視野を広く、相手の人生を尊重、本当にやりたいことを実践する、自分自身、健康、エネルギーを計算して使う、人生の残り時間を大切に
社会への願い	負の遺産を残さない、今の若者が今のお年寄よりも幸せになる、争いごとのない世界
役割	若者の邪魔をしない・させない、社会を転換させる、信じられる未来を本気で作る、固定概念を壊して再構築する、例年通りをやめる、上の世代をおさえる
恐れ	これまでの生活・地位がなくなる、未熟さ、時間切れになること、無意識の老害、知らないことが恥ずかしい、病気

○ 50代以上グループ①

項目	内容
大切にしたいこと	自分を信じる、人・モノ・仕事に愛情を持つ、時間（今が大切）、思いやり、許すこと
社会への願い	信頼に応える、何度でもやり直せる、弱者を見捨てない、社会の側の障害をなくす（障害も個性だと認識できる）、社会の評価軸が複数に、互いに認め合う、争いがなくなる、環境も大切に持続可能に
役割	失敗にもOK（受容する、挑戦を若い世代に促す）、包容力（親にしてもらえない）、若者の邪魔をしない、背中を見せる（行動で示す）、失敗談こそ語る、肩の力を抜いて楽しく生きることを伝える、人は思い通りにならないことを伝える、でも楽しくもできる、ネットが当たり前でない世代の価値観を伝える、若い世代を認めている若者は自由にすればOK
恐れ	死ぬまでボケたくない（周りに迷惑をかけたくない）、能力が衰えて甘くみられる（人の世話になるのは嫌、最期まで誰かの役に立ちたい）、親の認知症（生涯学ばねば）、仕事のミス（衰えを認識）、自分の価値観を押し付けてしまわないか、先に答えを言う恐れがある（知ったかぶり）、戦争の記憶が失われる、挑戦しなくなる

○ 50代以上グループ②

項目	内容
大切にしたいこと	健康、穏やか、尊重、謙虚
社会への願い	平和、安全・安心に暮らせる社会
役割	傾聴と語り部（見守り、勇気付け、経験、体験、知識、背中押し）
恐れ	お荷物になること、老い、拒絶

イ 多世代ワーク「多世代で、世代の多様性が分断（反発や抵抗）ではなく豊かなりソース（資源）として溶かし合うには何が必要か」での発言

<主に 20 代の参加者発言要旨>

※波線は「現状に対する若者の見方・考え方」、直線は「交流を通しての気づきや変化」

- 多世代といっても、年代でひとくくり、一つの種類みたいにされてしまうが、一人ひとり違うので、世代間で何かをやる場合、固有名詞（個人と個人）で付き合える関係性を作っていくのが大切なのではないか。
- あえて話し合いに来るのはハードルが高いので目的のない集まりの場があってもいいのではないか。
- 相手を理解するために、傾聴の力、尊重する力、謙虚な姿勢がお互いに大切ではないか。
- 上の世代の人と何かをやろうと思うと、意見を押し付けられると思っていたが、ワークショップを通じ、上の世代が下の世代を思いやってくれていることがわかり、自分の見方次第だと思った。
- 若者だけでなく、上の世代も悩んでいる。上の世代が下の世代と話すときに、武勇伝ではなく、今も実際に悩んでいるような互いに悩みを打ち明けられるような場があるといいのではないか。
- 身近に、安心できる関係性、斜めの関係性を作れる場があるといい。
- 上の世代が自由にやっていいと言うことがあるが、どこまでが自由なのか定義して、伝えて欲しい。自由にやって結局ダメだと言われる経験が多い。
- 若者しか持っていないリソースもたくさんあるので、上の世代はそういったリソースをしっかりと取り入れるということも大事である。

ウ 振り返り「今、あなたの胸に浮かぶ問いは何か」での発言

<主に 20 代の参加者発言要旨>

※波線は「現状に対する若者の見方・考え方」、直線は「交流を通しての気づきや変化」

- 上の世代の話を聴いて、自分の中の思い込みが外れた。今日の上の世代の方は、下の世代を応援したいと思ってきている。でも今の社会には反映されていないように感じる。どうしたら今の社会につなげることができるだろうか。
- 上の世代が若者を応援する、邪魔にならないように配慮していることを知り、

おせっかいだと感じていた自分が申し訳なく思えた。今日のような場があるとい  
いし、作っていききたい。

- 今日の経験をコミュニティにどう持ち帰ることができるか考えたい。多世代の  
意見を聞ける場というのは、とても大切なのもっと参加していききたい。
- 誰かに何かを期待される場が多く、どう見せたいかを先行して、自分のことを  
見つめられる場がなかったが、今日の間では、自分のことを見つめ、固定概念や  
プライドを置くことができた。
- 生きてきた時代が違うので、世代間が分かり合えないということは仕方ないか  
もしれないが、分かり合えないという事実を受け入れて、どのようにコミュニケ  
ーションをとるのか考えていききたい。
- 多世代であることが重要というより、多様な人が集まり、話ができることが重  
要だと思う。今日の間に来た人は、目的（方向性）が同じだったから安心して話  
すことができたのだと思う。多世代で話すことと、目的（方向性）を同じにする  
こと、どちらが難しいのだろうか。

## 参考 「多世代ワークショップ」グラフィックレコード

グラフィックレコードとは、「議論や対話のプロセスを構造化して、ビジュアルとしてリアルタイムで描きだす手法である。単なる情報整理や記録だけでなく、場の議論を整理し、フィードバックを与えることで課題解決を促進するファシリテーションの手法の一つである。（出典 課題解決のためのグラフィックレコード入門ホームページ）」

「多世代ワークショップ」では、グラフィックファシリテーターにワークショップの経過や参加者の発言を記録していただいた。参加者は、振り返りの中で、グラフィックレコードのワーク内容や経過、発言記録から気づきを再確認することができた。

### 【写真1 導入～ペアワークの状況】

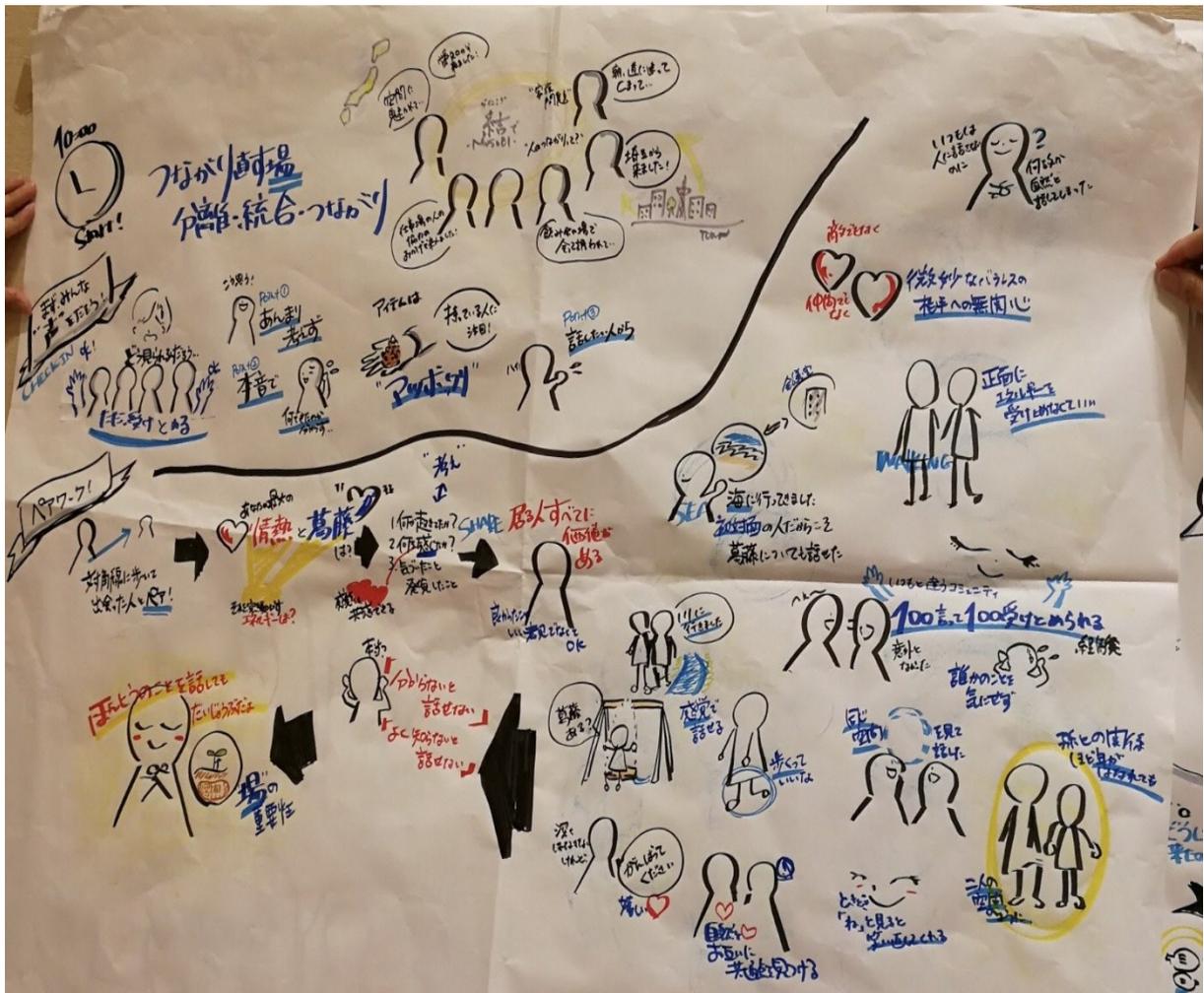


写真1 記載の主な記録内容（抜粋）

#### ○導入

- ・順番は決めずに、話したい人から発言する。
- ・周りにどう見られるかなど考えず本音で話すことが大切で、話を聞く方はただ受け止める。

#### ○ペアワーク

- ・よく知らないと話せない、分からないと話せないわけではない。
- ・初対面の人だからこそ、葛藤についても話せた。
- ・本当のことを話しても大丈夫という場の重要性。

【写真2 年代別ワーク～多世代ワークの状況】

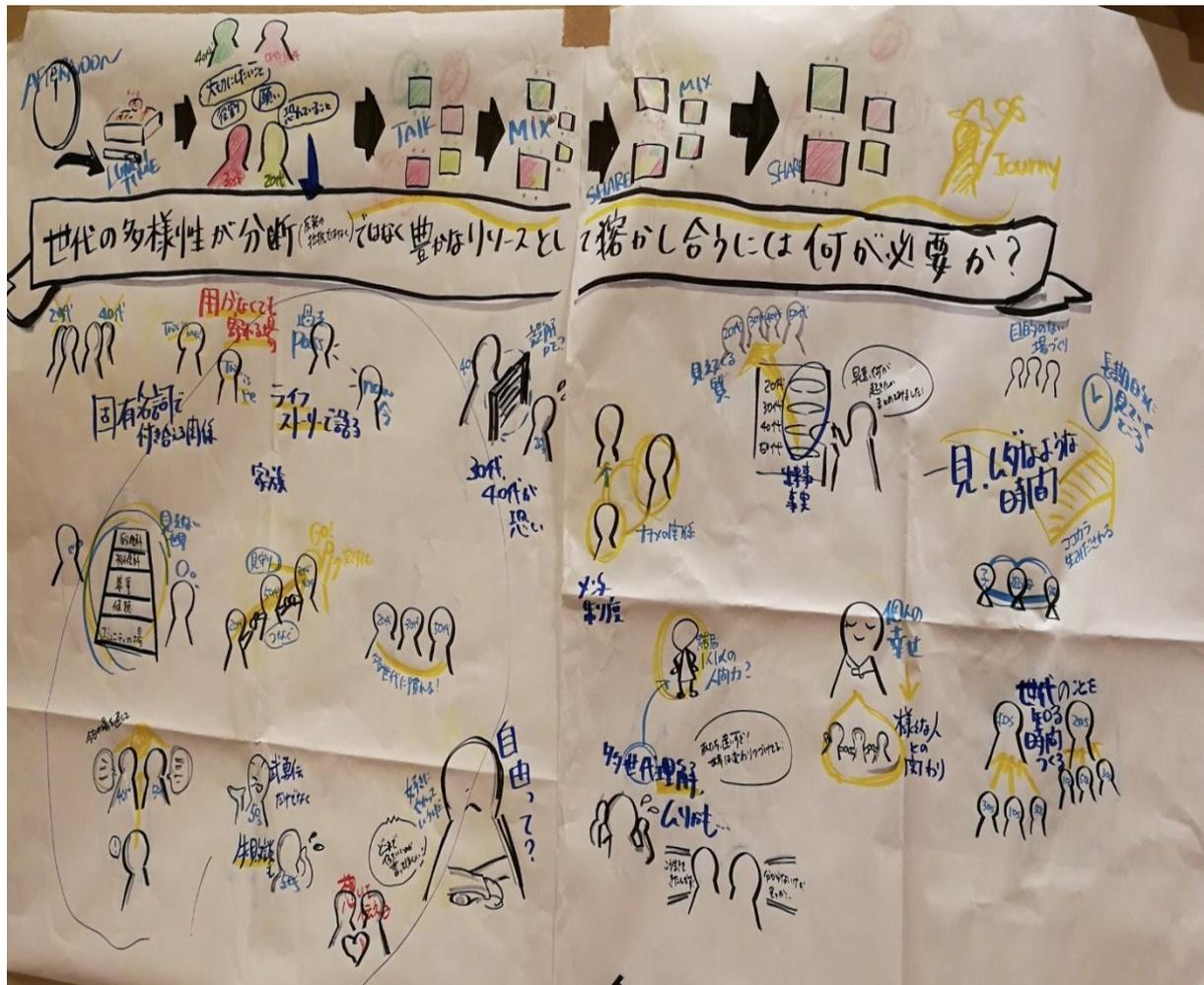


写真2 記載の主な記録内容 (抜粋)

○多世代・年代別ワーク

- ・武勇伝だけでなく、失敗談も必要。
- ・年代ではなく、固有な名詞で付き合える関係、ライフストーリーで語る。
- ・ナナメの関係、メンター制度。
- ・個人の幸せは、様々な人との関わりから生まれる。
- ・世代のことを知る時間をつくる。
- ・大人は好きにやっていいと言うけれども、どこまで好きにやっていいのか言ってほしい。
- ・多世代理解は無理かもしれない。私たちは違いすぎ、世界は変わり続けている。結局1人、1人の人間力ではないか。
- ・目的のない場づくりや一見無駄なような時間から生み出されるものがある。

【写真3 1日の振り返りの状況】

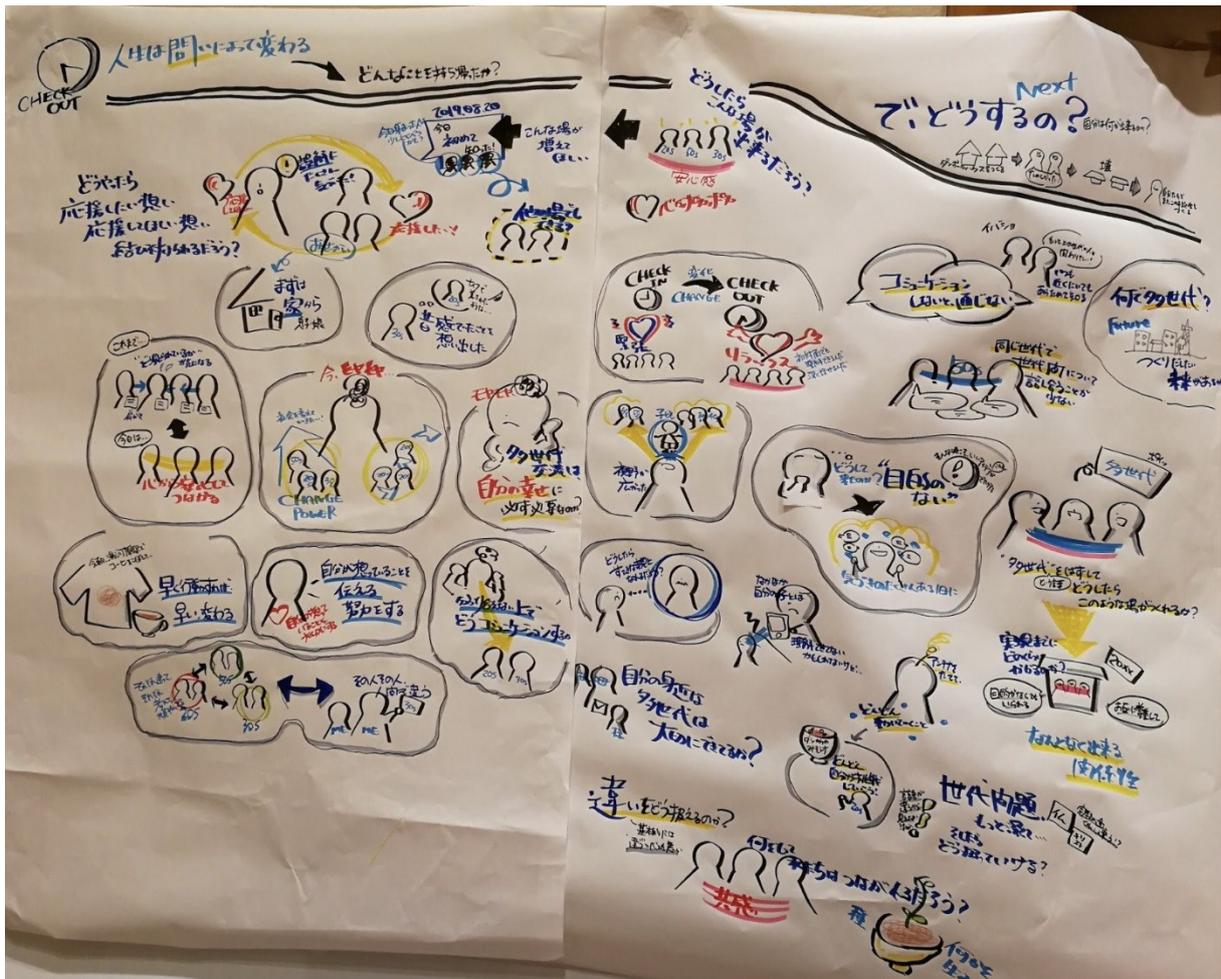


写真3記載の主な記録内容（抜粋）

○1日の振り返り

- ・ どうしたら応援したい思い、応援してほしい思いが結び付けられるだろう。
- ・ これまで、どう見られているか気になっていたが、今日は心から安心してつながれた。
- ・ 目的がなかったけれど、気づきのたくさんある日になった。
- ・ 多世代という言葉をはずしてどうしたらこのような場をつくれるか。
- ・ 目的がなくてもいられる、お互いに尊重して、何となくできる関係性。
- ・ 世代の違いをどう扱うのか。
- ・ 何をもって、私たちはつながることができるのだろうか。
- ・ 自分の身近で、多世代は大切にできているだろうか。
- ・ なかなか自分の子どものことは、理解できていないかもしれない。どうすれば素敵な親になれるだろうか。
- ・ 最初は緊張していたが、初対面でも理解できるんだ、深く話することができるんだと感じ、心がぼかぼかした。どうしたらこんな場ができるのだろうか。

## 2 検証結果

### (1) 現状に対する若者と大人の意識

- 20代は、自分自身に関心の重きが置かれている。20代が大切にしたいことは、自分の成長や可能性などであり、恐れは、経験がないことや失敗、先を見通せないことなどである。こうしたことを背景に、20代は、社会に対して若者に挑戦の機会を与える、挑戦を助ける、個性や意見を受け入れる場であることを願っている。
- 30代は、家族や人と人とのつながりに関心が向いている。安心して生活できて、子どもをはじめとして誰もがチャレンジできる、失敗しても受容する社会を願っている。30代は、こうした理想の社会を実現するとともに、世代間をつなぐ役割があると考えている。一方で、自らが身につけた能力、経験から視野が狭くなることや、安全と判断した範囲で動こうとすることを恐れている。
- 40代は、幸せな社会となるよう、実践し、既存の社会をより良く転換する世代として、若者を育て、尊重するとともに、上の世代を抑える役割があると考えている。また、50代以上は、互いに認め合い、やり直しができる安全安心な社会の実現を願っている。若者を尊重し、傾聴することや自身の知識・経験を伝えるとともに、若者に挑戦を促す、失敗を受容するといった見守りや勇気付け、背中を押すことが社会における役割だと考えている。

### (2) 多世代交流について

- 世代によって、生きてきた背景が異なるため、他の世代の境遇を理解し合うことは難しい。年上、年下ではなく、異なる人間、異なる文化背景を持っている人たちの交流という視点が必要である。
- 世代によって、文化や背景が異なることに加え、家族の形態が大家族から核家族に変わり、近年は共働き世帯が増えていることなども、多世代が互いを尊重した場をつくる時に重要な要素となることが考えられる。

### (3) 対話について

- 「Learning to have」という、知識やスキルを所有する、身に付けることを学ぶという考え方がある。一方で「Learning to be」という、自分や他人が存在していることそのものを学ぶ、特に他人が存在していることを学ぶことがとても大事だという考え方がある。人の意見に対して、常に自分なりの意味づけをしてしまうが、多世代ワークショップでは、黙って話を聴き、その人のメッセージ、その人の存在そのものを受け止める、受け入れることの大切さを改めて認識できた。
- 多世代ワークショップのペアワークでは、互いの情熱と葛藤を傾聴し、互いを受け止め、受け入れることにより、本当のことを話せる場を体験した。こうした対話を通して、様々な事象についてお互いの価値意識を共有し、共同作業や共同実践す

ることができるのではないか。

- 対話する中で、心地よい状況や状態をつくることができる。世代に関係なくフラットな関係で寄り添い合いながら、個の自分を話すことにより持続可能な居場所が自然とできるのではないか。
- 年代別ワークの中で、20代は経験がないことへの不安を語っていたが、「経験」の捉え方には、二つの側面がある。一つは、「量」として捉え、経験を積み重ねるというものである。もう一つは、「質」として捉え、経験により自らが変容し、新たな意味を獲得するというものである。自己変容を促す経験は、世代に関係なく、人と人の関係性から生まれるもので、経験の積み重ねだけでは得られないものではないか。

#### (4) 「場」の重要性について

- 人が集まるということは、必ずしも目的があるということではなく、いわゆる縁側談義のように、ぶらっと集まって話をする中で、良い関係性が築かれ、お互いに理解が進んでいく。多世代ワークショップでは、そういった「場」をつくることができたと考えられる。
- このような「場」に、何か結果を求める場合は、場にいる人同士は理性的な意見交換をすることになる。人間の意識や行動は、理性だけではなく、感情に動かされる部分があり、「共感」することが大切である。「場」づくりにおいては、共感し合える関係性が大切である。
- 若者の「場」として、SNSがあるが、文字により感情を表現する場となっている。多世代ワークショップの場では、身体的に空間や時間を共有することにより、言葉だけではなく、相手の表情や声の調子、雰囲気といった非言語的なものを感じたことにより、互いに共感し合える場となったと考えられる。

## 参考コラム

### ＜ケーススタディ⑩：「道遊び」「プレイストリート」＞（第3回・嶋村委員）

- 道路を歩行者天国にして、そこを遊び場や多世代交流の場、子育て空間などにする活動がある。
- 大人が大量に増えていく中で、子どもがまちの中で見える存在にしなければいけない。少人数の専門家が有料プログラムで屋内に子どもを囲っているだけでは、子どもが社会に受け入れられるのは難しいのではないか。
- 「町会」「商店街」というタテ社会の人たちと、若者の活動とか子どもの活動をしているネットワーク型のヨコの活動をしている人たちの2つを編みこんでいく「タテ糸とヨコ糸を編む」役割の人が地域には必要。
- 子どものことだけやるのではなく、大人も楽しまないと「子どもが遊ぶのも悪くないよね」という声が増えていかない。

【参考情報】一般社団法人 TOKYO PLAY (<http://www.tokyoplay.jp>)

### ＜ケーススタディ⑪：「地域の御用聞き～顔の見える関係から」＞（第3回・墓田委員）

- 昭和の時代に、酒屋さんやお米屋さんが「何か困っていませんか」ということで商売をしに行く「御用聞き」という状況があったことを参考に、無業の若者たちが、まちのお困りごとを手伝うということで、ビラを配ったところ、「高齢者からの草むしり」をはじめたくさんの希望が寄せられた。
- 新たに移り住んだ住民と昔からの住民との協力体制が整わない中、地域のお祭りなどでも若者たちの力が必要とされており、お祭りのお神輿を担ぐことで、みんなから感謝されて、コミュニケーションが自然とできるようになっていく。
- 農家にチンゲン菜やブルーベリーの収穫を手伝いに行くことによって、ひきこもりやニートの若者にとっては体力が付き、生活改善が自然にできるようになっていく。

### ＜ケーススタディ⑫：「東北復興マルシェ～顔の见えない地域支援」＞（第3回・墓田委員）

- 第1次産業で困っている東北の方の支援を行っている。
- 例えば、若者が立川の地域のお祭りで東北の米粉の焼きそばを焼いて売って、売り上げを困っている人たちにお返しするという取組みを行っている。
- 他にも、東北復興支援でマルシェを運営している。陸前高田のりんご農家の繁忙期に若者が年に3回、1週間の合宿で支援に行っている。
- その中で、若者が眠っているまちの物産を探しに行き商品を発掘、東京でマルシェを出店して販売する。若者自身がマルシェを企画し販売する作戦を立てており、社会に出る前に実践の現場で、みんなで話し合っ作戦を練って完売するような方向にまとめていく。これにより、今まで就職活動がうまくいかなかった若者たちも、かなり自信がつく。
- さらに、若者と東北の復興支援とを結びつけ、大手企業の社員食堂でもマルシェを開催。東北と大手町と立川の三角関係で取り組んでいる。

【参考情報】認定特定非営利活動法人 育て上げネット  
(<https://www.sodateage.net/>)

## 第5章 5つの提言～若者が活躍する地域づくりを進めるために～

「若者による地域づくりのカタチ」について議論を進める中で、若者と地域の関わりを考える上では、若者と他世代の関わりが重要であることが示された。「多世代ワークショップ」では、若者を中心とした多世代が集い、語り合い、共感し合える場をつくる中で多世代交流、対話や場の重要性が検証結果として示された。

地域には、町内会など地域住民が日常の中で関わる様々な場がある。こうした日常の場において、若者が大人とともにチカラを発揮することが望まれる。今後、地域の様々な場において、若者が活躍する地域づくりを進める上で大切にしたいポイントを提言としてまとめた。

### 提言1 「地域と地域づくり」～場の創出～

- 地域では、若者も大人も安心して自分らしさを発揮できる状態をつくることは簡単ではない。世代間のずれだけではなく、自分自身の思い込みが、自分らしさを発揮できない原因を作っている可能性もある。
- 目的がなくても人が集って語り合い、時間的、空間的にゆとりのある場で、他の人と顔を合わせることが大切である。
- 現在、核家族化が進んでおり、多世代で構成される家庭は少ない。大家族であった頃は、多世代の関係が形成され、家庭の中でいろいろな物の見方や考え方が育まれていた。地域に様々な考え方を持つ人たちが交流できる場があることにより、若者が多様な人間関係を築き、物の見方を多元化できる機会となる。
- 今後の地域の捉え方は、従来のように地域を一元的に捉えるのではなく、様々な場や主体が相互に関わり合いながら、多層的な地域となることをイメージすることが大切である。

### 提言2 「人と人をつなげる」～つながりの創出～

- 地域には、家庭、学校、町内会、子ども会など、人と人がつながる様々な場がある。人は、地域の様々な場で人間関係を持ちながら生活している。  
子ども、若者、大人の各世代は、それぞれが発揮できる力を持ち、存在意義がある。世代を超え、地域の様々な場で、人と人の共感的な関係を育む役割を担う人材が増えていくことが大切である。
- また、地域を支える町内会や子ども会、子ども・若者の育成支援活動などを行っている人たちがつながり、互いに協力しながら、多層的な地域にしていくことが必要である。

### 提言3 「若者と大人が共感し合える関係を育む」～対等な関係性の構築～

- 地域づくりを進めるには、世代を問わず、一緒に地域をつくることができる関係性が大事である。多世代が集まると、大人が若者に一方的に自分の経験を伝えるということが生じやすく、若者は大人に言ってもわかってもらえないから、何も話さないということがある。若者も大人も安心して自分らしさを発揮するために、大人が若者を指導するのではなく、大人と若者が対話し、共感的な関係から対等な関係を構築することが重要である。
- 対話では、人の意見を評価、判断せず、人の話を傾聴し、その人の存在そのものを感じてみるのが大切である。そこから共通の興味や関心のあるテーマ、願いなどが発見、共有されると共感が生まれる。このように若者と大人が対話し、共感し合える機会を持つことにより、対等な関係ができ、新たな文化的価値を創造して地域づくりを進めることができる。

### 提言4 「若者と大人がともに地域をつくる」～相互理解と協働～

- 「若者による地域づくりのカタチ」をテーマに議論を進めてきたが、地域には多様な世代が存在する。若者の持つ「チカラ＝社会に与える影響力」を大事にしながら、若者と大人がともに地域づくりを進めることが大切である。
- 多世代の中で若者がチカラを発揮するためには、若者も大人も互いに他の世代を理解することが大切である。世代の違いは、単に年上、年下ということではなく、各人が生まれ、経験してきた時代背景による様々な考え方の違いであり、一人ひとりが異なる考え方を持つことを理解することが大切である。
- また、若者だから未熟で能力がなく、大人だから完成した能力があるのではなく、若者だからできること、大人でも経験がなく能力を発揮できないことがある。若者と大人がお互いの得意なことを出し合い、苦手なことを補い合いながら、相互にチカラを発揮し合うということが大切である。
- こうした理解の上で、若者と大人がパートナーシップを持ち、一人ひとりが主体的に地域づくりに関わることを求められる。

## 提言5 「場づくりを担う人に求められること」～寛容な場の醸成～

- 人は、知らない人だから本音を話せないということではない。人は無意識のうちに、周囲の評価を意識して、本来の自分ではない人を演じ、自分を良く見せようと振る舞うようになる。こうした意識をほぐせる場が必要である。場づくりを担う人は、その場で起こる言動や行動を良い、悪いという考え方で評価せず、ありのまま受け入れることが大切である。これにより、場に集まる人が安心して対話でき、お互いの気持ちに寄り添い、共感できる場をつくることができる。
- 場に集まる人々が安心して対話できる環境を整えるために、場づくりを担う人は、自分や相手の感情や反応を丁寧に観察し、そこであったことを評価せずに、受け止めることが求められる。場づくりを担う人も、その場では、感情や反応が動くことがあるが、自らを観察し、自分の感情を受け止めながら、場づくりの経験を積む必要がある。また、集まる人たちが安心できる場になるよう、時間や空間に十分なゆとりを持たせることが必要である。
- 多世代が集まる場では、大人が自分のエゴで若者に対して自分が語りたい、良かれと思って相手のことを一方的に捉えてコントロールするように接することで世代間のずれが生じることがある。多世代が集まる場で、場づくりを担う人は、若者と大人が安心して対話できるような土壌を丁寧に作る必要がある。
- 地域住民が日頃から関わる場は特別なものではない。場づくりを担う人も、専門家ではなく、町内会や子ども会の運営者、青少年指導員や子ども・若者の育成支援活動をしている人など、地域で地道に活動している方々である。こうした方々のほか、家庭など普段の生活においても、ゆとりのある時間や空間の中で、お互いを評価せず、ありのまま受け止め、共感する場をつくるよう心がけていくことが必要である。

## おわりに～共感的な関係を育む人材を育成する～

近年、少子化の進行や、若年層における無業者、非正規雇用者が占める割合の高さ、子どもの地域活動の減少、スマートフォンの急速な普及など、青少年を取り巻く状況は激しく変化している。

こうした状況から、前期の青少年問題協議会では「青少年の自立・自律を支援する」をテーマに今後の神奈川の青少年の育成と自立への支援のあり方について調査審議し、神奈川が目指すべき方向性を提言した。また、協議内容は、平成 28 年 3 月に改定された「かながわ青少年育成・支援指針」に反映された。

前期協議会で「社会構造の変化により孤立化・孤独化する若者」や、「人間関係の希薄化により地域において青少年を育む力が低下している」ことがクローズアップされたことから、本協議会では、若者を「核」とした地域の活性化と、若者の「自立・参加・共生」を実現する地域づくりを調査審議した。

審議の過程では、4つの論点から現状を整理し、「若者」と「地域」を考える3つの視点をまとめた。また、若者の意識や実態を理解するため、実践検証事業として「多世代ワークショップ」を開催し、議論の検証を行った。「多世代ワークショップ」では、20代から60代までの年代の方に御協力いただき、多世代が安心して交流する中で若者が日頃感じていることを自然に語るができる場となった。実践検証事業を踏まえ、「場の創出」、「つながりの創出」、「対等な関係性の構築」、「相互理解と協働」、「寛容な場の醸成」の5つを提言した。

おわりに、今後、行政に期待される役割を提言したい。実践検証事業「多世代ワークショップ」では、委員が事前準備段階で、安心できる場の作り方について学ぶ機会を設け、多世代が安心して語り合える場の実践を体験した。地域には町内会、子ども会、商店街の集まり、子ども食堂や地域住民の居場所など様々な場がある。こうした場に参加する誰もが、安心して過ごせるよう、人々が互いを受容し、共感し合える場を構築することが重要である。そして、地域の様々な場が目的を共有して緩やかにつながり合いながら活動することにより、多層的な地域を構成していくことが大切である。行政が地域活動実践者など民間と協働しながら、共感的な関係を育む人材を育成することが必要である。

なお、本協議会では、公募委員として大学生の村田委員に参加していただいている。協議会が社会参画の場となっているとともに、同委員から大人、社会に対して問題提起がされる場となった。今後の協議会においても、積極的に若者が参加できる機会を設けることが大切だと考える。

地域における人と人の関係が希薄になる中で、若者も大人も地域と接点を持つことが難しくなっている。若者、大人や地域活動の実践者と行政が協働しながら、若者がチカラを発揮して地域づくりを進めていけるよう期待したい。



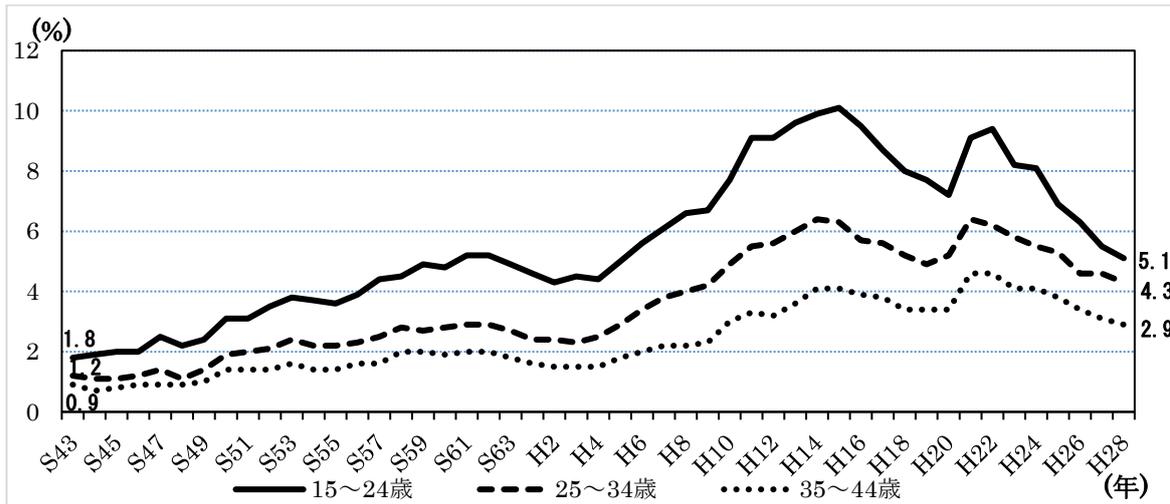
## 参 考 编

審議テーマに関する説明図表【第1章1(2)関係】

●大学卒業後の状況

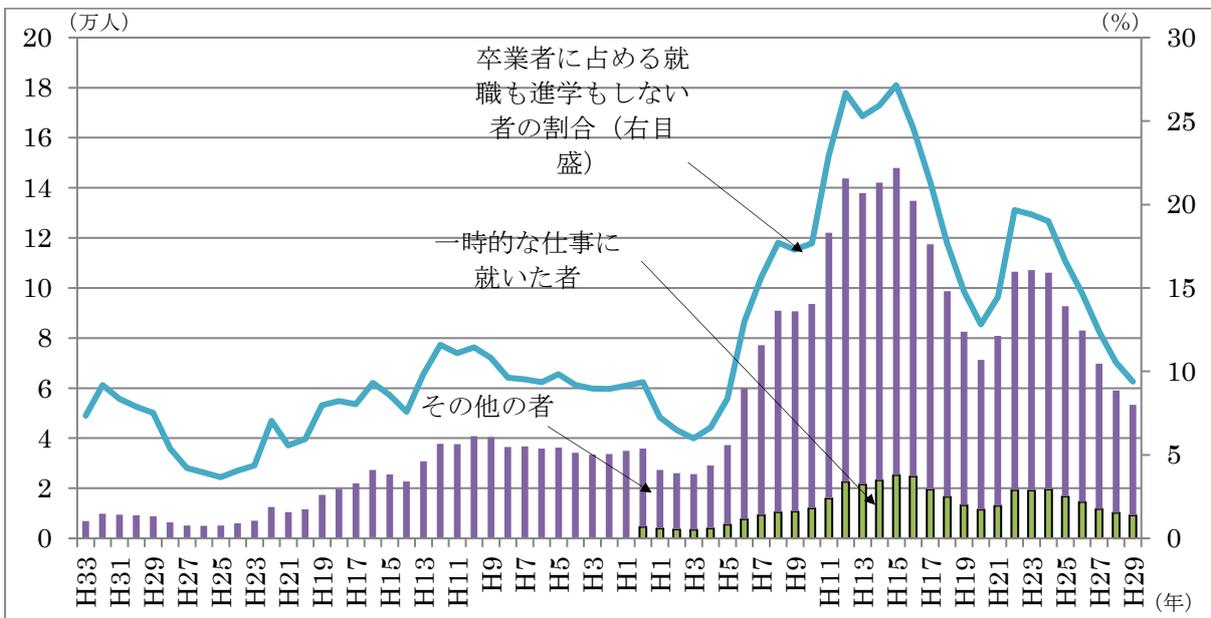
若い世代ほど完全失業率が高い。大学卒業者のうち、就職も進学もしないものは、10人に1人となっている。非正規雇用の割合は平成4年と同24年を比較すると全体的に増加しており、35歳未満の男性の4人に1人、女性の2人に1人が非正規雇用である。

図表(1) 年齢階級別完全失業率



出典：「労働力調査（基本集計）」（総務省）を基に作成

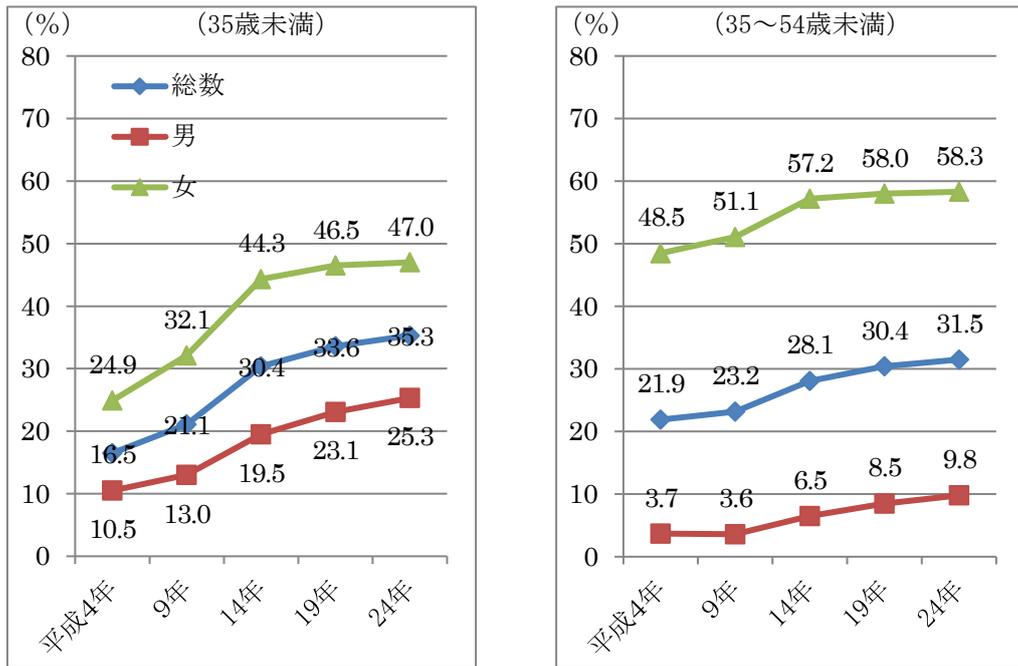
図表(2)：大学卒業者のうち就職も進学もしないものの数及び割合の推移



出典：「学校基本調査」(文部科学省)を基に作成

- (注)1. 学校基本調査において、卒業者の状況は、「進学者(就職し、かつ進学した者を含む.)」、「就職者」、「臨床研修医(予定者を含む.)」、「専修学校・外国の学校等入学者」、「一時的な仕事についた者」、「左記以外の者」、「死亡・不詳」となっており、上記グラフの「就職も進学もしない者」はこれらのうち「一時的な仕事に就いた者」及び「左記以外の者」(グラフにおいては「その他」)をいう。
2. 一時的な仕事に就いた者は1988年、専修学校等入学者は2004年からで、それ以前はその他に含む。

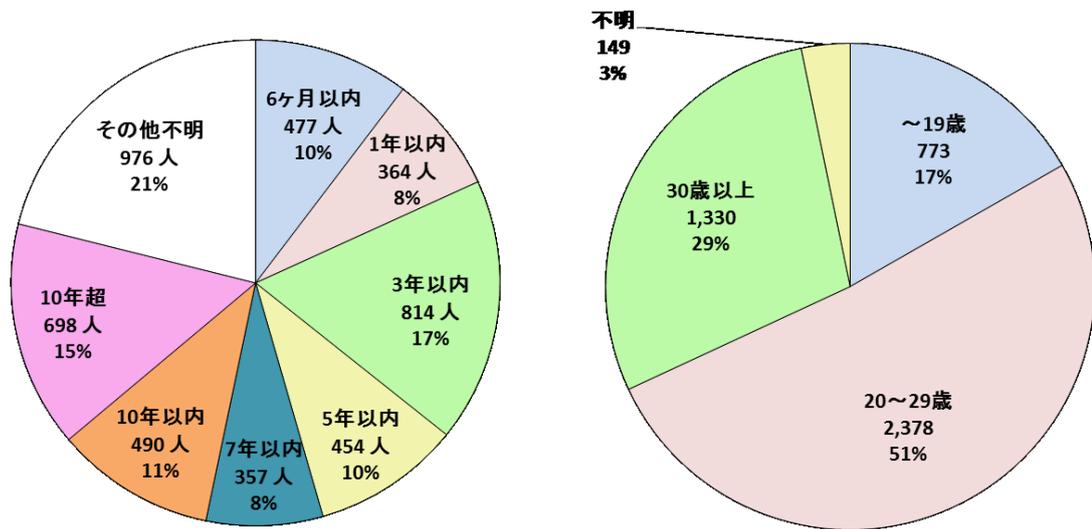
図表(3)：男女、年齢階級別非正規の職員・従業員の割合の推移 -平成4年～24年



出典：総務省「平成24年就業構造基本調査」を基に作成（注）平成4年及び9年の結果は千人単位で算出したもの。

●相談実績から見たひきこもりの状況

図表(4) かながわ子ども・若者総合相談センター（ひきこもり地域支援センター※）相談実績（平成16～28年度）から見たひきこもりの状況（神奈川県）



(注)この統計は、相談員の電話での聞き取りによるものであり、相談の主な内容が「ひきこもり」であるとしたものを、延べ人数で集計しています。

※ 厚生労働省は「ひきこもり対策推進事業」として、各都道府県・指定都市に、ひきこもりの第一次相談窓口としての機能を有する「ひきこもり地域支援センター」の整備を推進しており、神奈川県では、青少年センター（青少年サポート課）がその機能を担っている。同センターの設置目的は、ひきこもりの状態にある本人や家族の方が、地域の中で最初にどこに相談したらよいかを明確にすることによって、より支援に結びつきやすくすることにある。

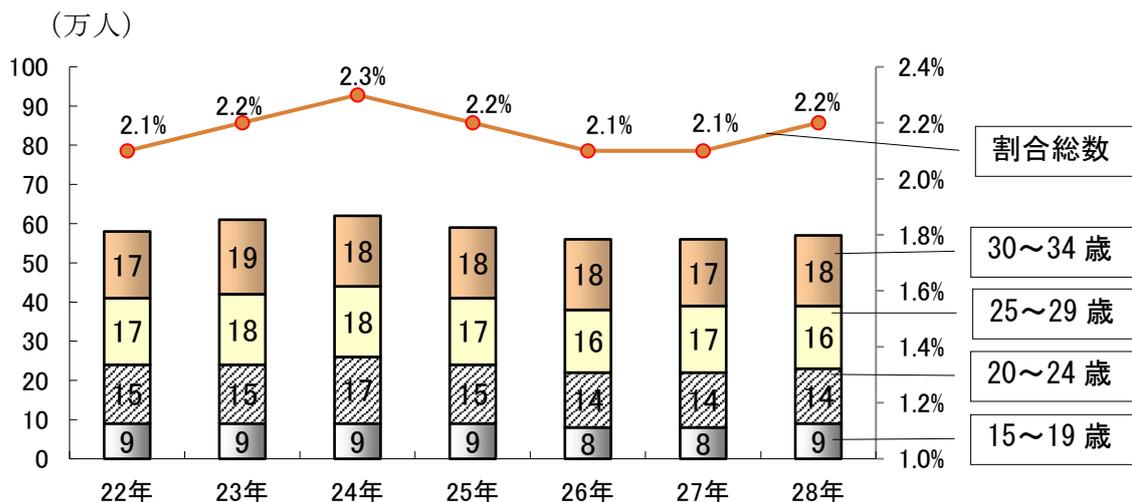
## ●若年無業者（ニート）の状況

全国の若年無業者（ニート状態にある若者）の数は、平成28年は約57万人であり、若年人口2,587万人の約2.2%にあたります。年齢階級別にみると、30～34歳が18万人と最も多く、ついで25～29歳が16万人となっています。

(備考) ニート（NEET）とは

Not in Education, Employment or Training（就学、就労、職業訓練のいずれも行っていない若者）の略で、元々はイギリスの労働政策において出てきた用語。日本では若年無業者のことをいっています。若年無業者とは、15～34歳の非労働力人口のうち家事も通学もしていない者をいいます。

図表(5)：年齢階級別若年無業者の推移（全国）



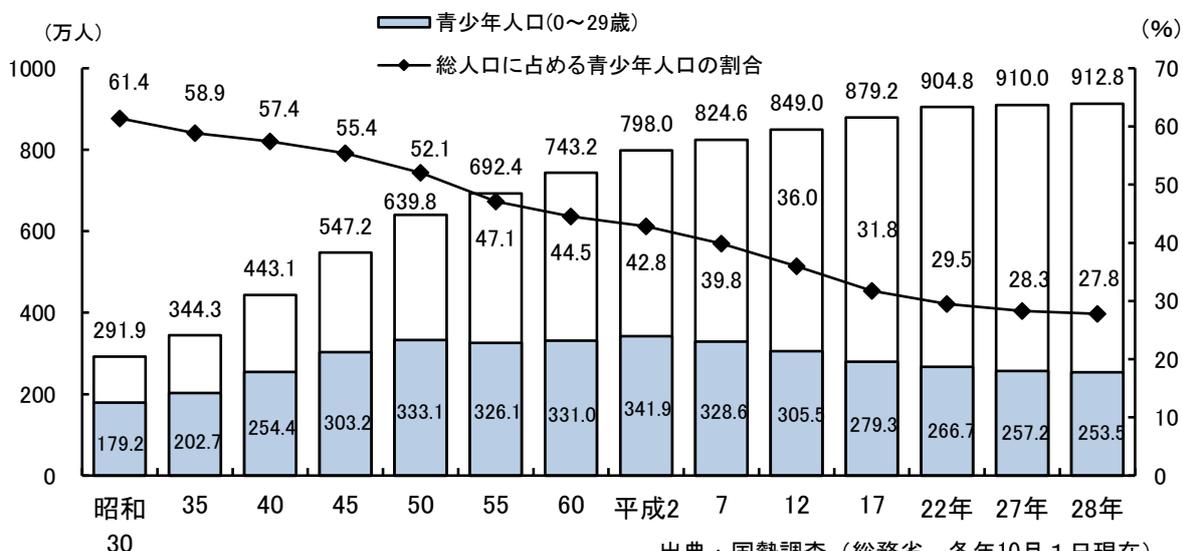
(注) 総数は、千人単位を四捨五入しているため、合計数とは必ずしも一致しない。

出典：労働力調査(総務省)

## ●県内の青少年人口の推移

本県の総人口は平成28年1月1日現在で912万8,037人（男455万8,967人、女456万9,070人）であり、0～29歳の青少年は253万4,771人（男130万9,615人、女122万5,156人）で総人口の27.8%になります。昭和30年には61.4%と過半数を占めていましたが、その後減少を続けています。

図表(6) 青少年人口の推移（神奈川県）



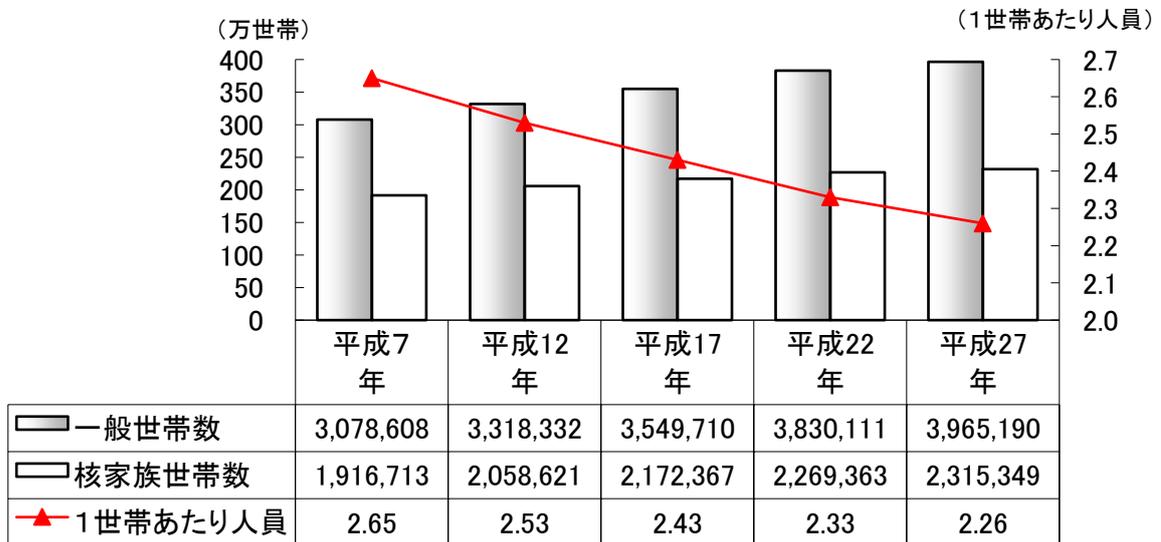
出典：国勢調査（総務省 各年10月1日現在）

※平成28年は、神奈川県年齢別人口統計調査結果（統計センター：平成28年1月1日現在のものを加算）

●核家族化の状況

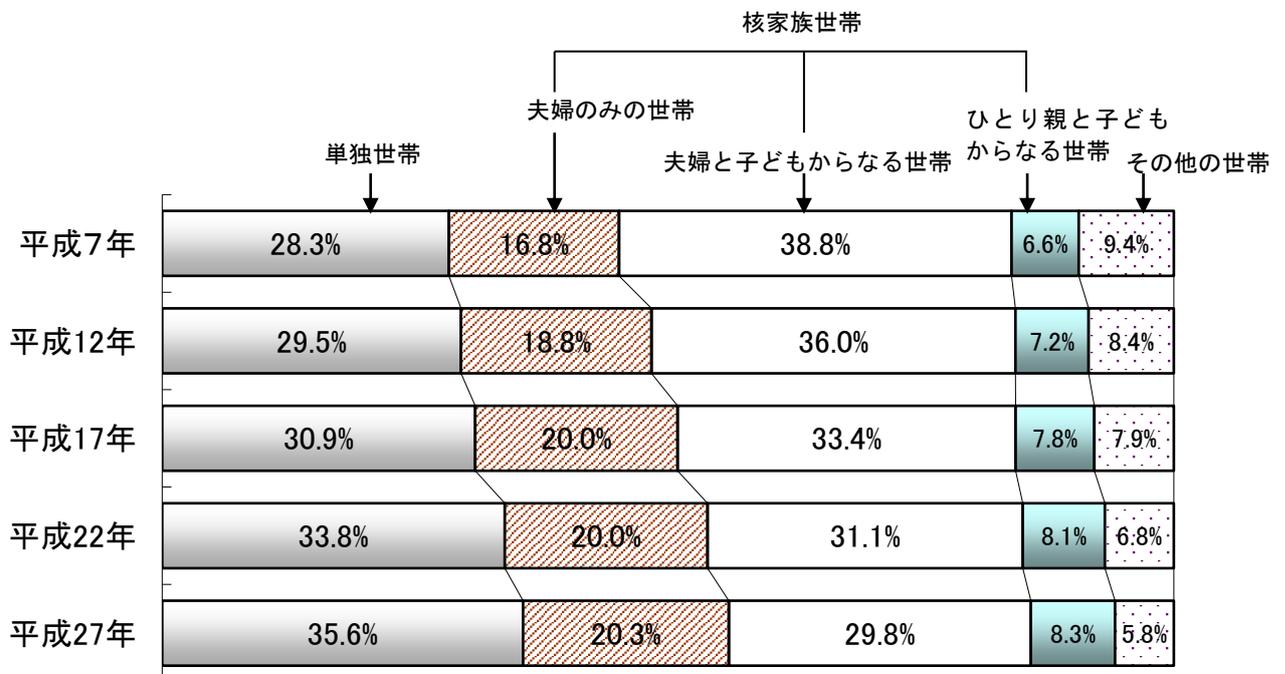
一般世帯総数、そのうちの核家族世帯数ともに増加傾向にあり、一般世帯の1世帯あたりの人数は減少傾向にあります。また、一般世帯の家族類型の割合の推移では、夫婦と子どもからなる世帯が減少傾向にあります。

図表(7) 一般・核家族世帯数及び平均世帯人員の推移(神奈川県)



(注) 1 ここでの一般世帯とは、住居と生計を共にしている人々の集まり又は一戸を構えて住んでいる単身者をいう。  
 2 核家族世帯とは、一般世帯のうち①夫婦のみ ②夫婦と子どもからなる世帯 ③ひとり親と子どもからなる世帯 をいう。  
 出典: 国勢調査(総務省 各年10月1日現在)

図表(8) 一般世帯の家族類型の割合の推移(神奈川県)



出典: 国勢調査(総務省 各年10月1日現在)

## ●子どもの貧困

厚生労働省の調査によると、子どもの貧困率（貧困線（等価可処分所得の中央値の半分）を下回る子どもの割合）は、13.9%となっています。また、子どもがいる現役世帯（世帯主が18歳以上65歳未満の世帯）のうち「大人が一人」の世帯員では50.8%となっています。

図表(9) 子どもの貧困率（全国）

	昭和 60年	63	平成 3年	6	9	12	15	18	21	24	27
	（単位：％）										
相対的貧困率	12.0	13.2	13.5	13.8	14.6	15.3	14.9	15.7	16.0	16.1	15.6
子どもの貧困率	10.9	12.9	12.8	12.2	13.4	14.4	13.7	14.2	15.7	16.3	13.9
子どもがいる現役世帯	10.3	11.9	11.7	11.3	12.2	13.0	12.5	12.2	14.6	15.1	12.9
大人が一人	54.5	51.4	50.1	53.5	63.1	58.2	58.7	54.3	50.8	54.6	50.8
大人が二人以上	9.6	11.1	10.8	10.2	10.8	11.5	10.5	10.2	12.7	12.4	10.7
	（単位：万円）										
中央値（a）	216	227	270	289	297	274	260	254	250	244	245
貧困線（a/2）	108	114	135	144	149	137	130	127	125	122	122

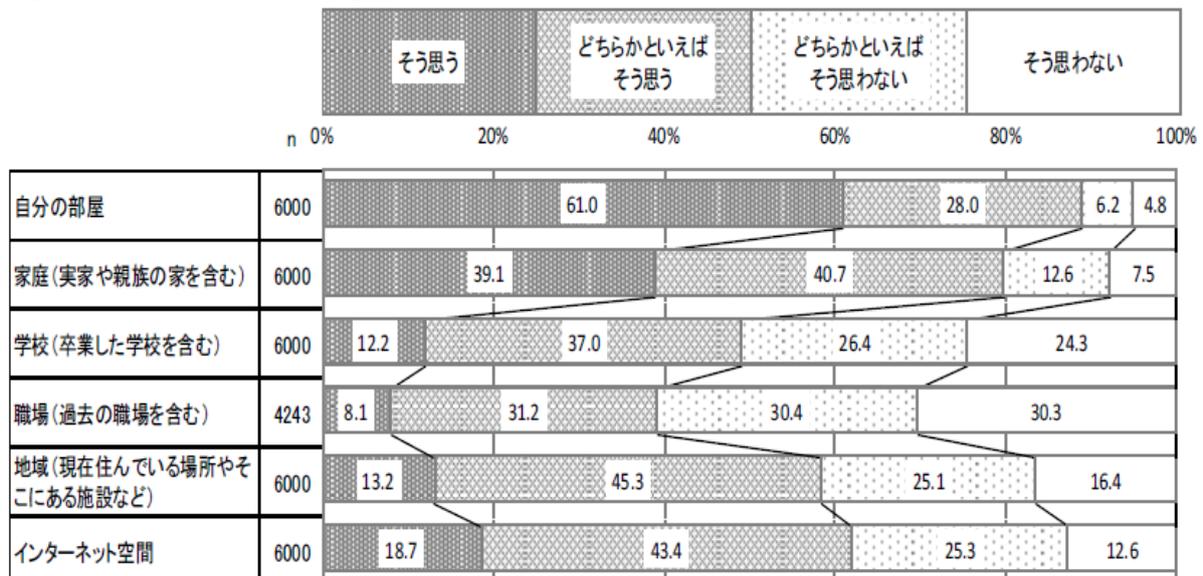
- 注：1) 平成6年の数値は、兵庫県を除いたものである。  
 2) 平成27年の数値は、熊本県を除いたものである。  
 3) 貧困率は、OECDの作成基準に基づいて算出している。  
 4) 大人とは18歳以上の者、子どもとは17歳以下の者をいい、現役世帯とは世帯主が18歳以上65歳未満の世帯をいう。  
 5) 等価可処分所得金額不詳の世帯員は除く。

出典：平成28年国民生活基礎調査（厚生労働省）

## ●子ども・若者の意識

ほっとできる場所、居心地の良い場所として、「そう思う（計）（「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」の合計）が最も高いのは、「自分の部屋」（89.0%）。次いで“家庭（実家や親族の家を含む）”（79.9%）、“インターネット空間”（62.1%）と続いている。

図表(10) 居場所ごとの満足度



※職場（過去の職場を含む）は、就業経験者のみ回答

出典 子供・若者の意識に関する調査(平成28年度)(内閣府調査)

## ●子どもの地域活動の状況

神奈川県内の子ども会の数は、2,172団体で、11万3,593人が会員として活動していますが、少子化とあいまって、団体数、会員数ともに減少傾向にあります。

一方、非行防止活動やいじめ相談、児童虐待防止、児童相談、放課後活動の実施、学童保育事業など、子どもの健全育成の分野で活動するNPO法人の数は、年々増加しています。

図表(11) 子ども会の団体、指導者、会員数の推移（神奈川県）

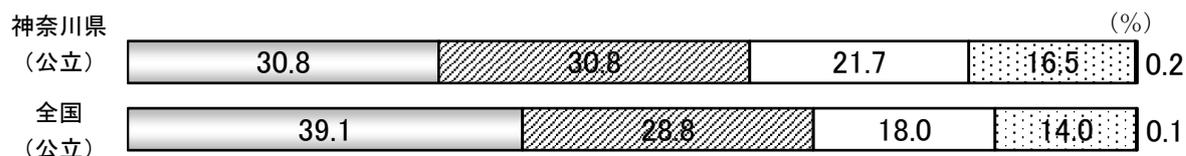
	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度	28年度
団体数（団体）	2,802	2,545	2,541	2,393	2,390	2,172
指導者数（人）	42,310	41,918	37,281	35,056	34,592	32,174
会員数（人）	157,863	141,320	136,818	129,401	129,474	113,593

出典：平成28年度青少年関係団体の会員数等の調査（青少年課）

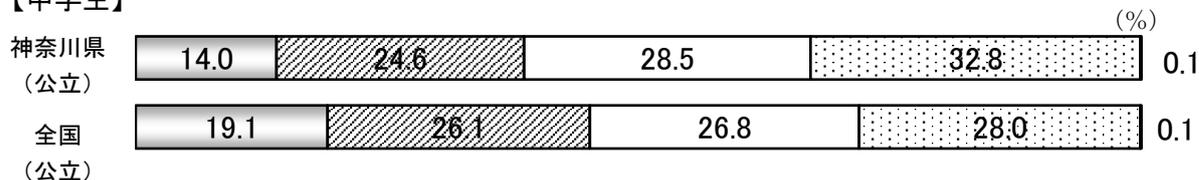
図表(12) 今住んでいる地域の行事に参加していますか（神奈川県）

今住んでいる地域の行事に参加していると答えた割合は、小学生が61.6%、中学生が38.6%です。

### 【小学生】



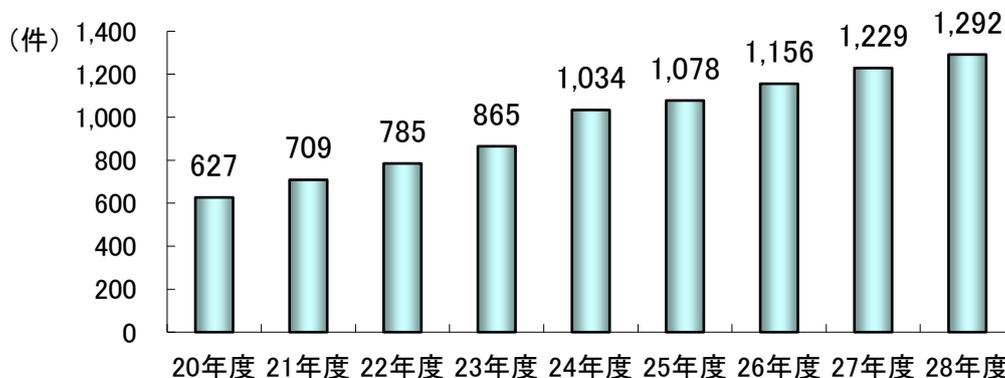
### 【中学生】



当てはまる  
 どちらかといえば、当てはまらない  
 その他・無回答
 
 どちらかといえば、当てはまる  
 当てはまらない

出典：平成28年度全国学力・学習状況調査（文部科学省）

図表(13) 子どもの健全育成の分野で活動するNPO法人の数の推移（神奈川県）



（備考）平成23年度以前：神奈川県内にのみ事務所を持つ法人  
 平成24年度以降：神奈川県内に主たる事務所を持つ法人

出典：NPO協働推進課資料

平成28・29年期神奈川県青少年問題協議会実践検証事業  
業務委託報告書

株式会社ワクワーク・イングリッシュ

1. 事業目的

平成28・29年期神奈川県青少年問題協議会では、「若者による地域づくりのカタチ」をテーマに議論を進めている。本事業は、地域づくりをめぐる若者の意識や実態を理解し、これまでの協議会の議論の検証を行うものである。

2. 事業内容

若者を中心とした様々な世代の人が集い、語り合い、共感しあえる場をつくる中で、若者が日頃、自分自身や多世代、地域や社会についてどう感じ、考えているのかなどを理解するためのワークショップを実施。

(1) 多世代ワークショップの実施

実施日：2017年8月20日（日）10時～17時

参加者：若者世代（高校生・大学生～20代）、地域で活動する若者、地域活動に関心のある若者  
大人世代（30代～）若者を応援したい気持ちのある人

場 所：湯河原リトリート ご縁の杜

(2) 多世代ワークショップ事前準備会

実施日：2017年8月19日（日）10時～17時

参加者：青少年問題協議会委員、若者とともに場作りを実践している方々

場 所：ゆがわらっことつくる多世代の居場所

3. 多世代ワークショップ実施報告

実施日：2017年8月20日（日）10時～17時

参加者：計：35名

高校生・大学生 9名

就業者（20代） 4名

就業者（大人） 12名

青問協委員 6名

県職員 2名

ファシリテーター 1名（由佐さん）

グラフィックファシリテーター 1名（原田さん）

年齢別：計35名、20代14名、30代3名、40代9名、50代-60代、9名

実施内容：

10:00 集合

10:30 全体チェックイン

- ・名前、どんな気持ちで今、ここにいるのか、今日の場への想いを全体でシェア



何をやるのかわからないけれど、多世代でワークショップをすることに惹かれてやってきたという声が多い。

11:00 2人ペアワーク

- ・サークルになっている状態から、対角線上にそれぞれが歩き、ぶつかった人とペアになる
- ・ペアワークのお題
  - 1) 私の最大の情熱は？
  - 2) 私の最大の葛藤は？
- ・自由に好きな場所で、40分間、ペアで2つの問いを語り合う



11:40 ペアワークの振り返り

- ・2つのペアがくっつき、4人1組になり、ペアワークの体験、感じたことをシェア  
(1-3は、1人ずつ順番にシェアをする)
  - 1) 何が起きていたか
  - 2) 何を感じたか？  
→頭で処理したことではなく、ハートで感じていることを分かち合う
  - 3) 気づいたこと、発見したことは？  
(以下は、4人で話し、探求する)
  - 4) どんな空間(場)が2人の間にはあったか。それはなぜか。



自分の所属やバックグラウンド関係なく、いきなり、情熱と葛藤を話せたことが不思議。聞いてもらえて嬉しいし、安心している。

## 12:20 全体でシェア

### 〈参加者からのシェア内容〉

- ・初対面なのに、いきなり情熱と葛藤を共有できた驚きと、聴いてもらえた喜びがある。
- ・外に出て歩いて、川の音を聞きながら、シェアできたことで、会議室の中では絶対に話せないことが話すことができた。
- ・お互いが何者かわからない状態で、ゆっくり歩きながら、情熱と葛藤を話すというのは、普段なかなかない。この場に来ている仲間だから、安心して話せし、情熱と葛藤を話すというのは自分をオープンにしないと話せないで、オープンで安心できる関係性ができた。
- ・会社では、警戒心が強くて、本音を言わないが、対角線上に歩いて、1分も経たないうちに、自分の子どもと同じくらいの年齢の若者と、情熱と葛藤を話すことができたのは、これはどうして何だろう？どうして、安心して素直に話せし、聴くことができたのはなぜだろう？この場の空間の何がそうさせるのだろうか？
- ・孫かもしれないくらいの若者と歩きながら話せたことが良かった。仕事では、自分の意見を通さないといけないので、この人、感情理論だとか考えながら、話すことが多いが、今日は、素直にしゃべりたいことを話して、否定されない感覚がとても心地が良いと感じられて嬉しかった。

### 〈ファシリテーターからのコメント〉

- ・どうして初対面の人が恐ろしいのかというと、よくわからないからというが、必ずしもそうではない。何が人は危険だというのを作り出しているかということ、私たちの思い込み。人は知らないと言えない、話し合えない、わかりあえない、それは本当なの？という問い直しが必要。午前中の意図は、この場では、みんなが本当のことを言っても大丈夫だという場を作ること。午後は、世代の豊かさは何かをみんな話し合える時間にしていきたい。

## 12:45 ランチタイム

## 13:30 年代別ワーク

- ・年代別に分かれて、以下の問いをそれぞれのグループで模造紙に書き出す
  - 1) 自分たちの世代が大切にしたいことは？
  - 2) 社会への願いは何か？
  - 3) どんな役割があると思うか？
  - 4) 恐れ・不安は何か？

## 14:30 年代別ワークの内容シェア

- ・各年代、1人を残して、他のメンバーは他の年代へ移動し、シェアリング×2回

<年代別ワーク結果>

<p>① 20代</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>可能性をつぶされたい</li> <li>ゆりほり(仕事とプライベート)</li> <li>価値をうむ</li> <li>やり切る</li> </ul>	<p>②</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>制限されない</li> <li>挑戦を助けてくれる</li> <li>多様性を受け入れる</li> <li>下の世代が幸せになる</li> </ul>
<p>③</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>新しいコミュニティをつくる</li> <li>挑戦できる(変えられる)</li> <li>上の世代と下の世代の両世代にアクションを起こせる</li> </ul>	<p>④</p> <p>知らない・経験がない 不安がない</p> <p>→これが良くないことも... 実際行動した時に従来のやり方に染まる可能性もある</p>

<p><u>大切にしたいことは何?</u></p> <p>自分 健康 &gt; お金 経験 人 大切な人と 定期的に コミュニケーション</p>	<p><u>社会の原質は何?</u></p> <p>平和 個性 人の個性や 人の意見を 言容と社会</p> <p>世代間のギャップ とりのとりに 言容や受容(制度がゆだね) とりのとりに 多様性が受け入れられる 社会に ↓ 生活 普通の人 個性の個性 受け入れられる 社会</p>	<p>20代</p>
<p><u>どんな投資かか あると思うか</u></p> <p>今までの理想か 変化を促す 新しい世代 投資の時代か 変化を促す</p> <p>投資 固定費か 少ないから 社会と変えたい</p>	<p><u>IR 心か不安か?</u></p> <p>失敗 後悔の心か</p> <p>先に見えない 何かを促す... 変化を促す 投資の時代か</p> <p>反</p>	

# ①. 自分に正直

自分の心にしがう

- 自分の 可能性 を否定したくない
- できないから チャレンジ しない ×
- 「や、後悔」「失敗を恐れない」
- チャンス・出会い を大切に

# 20代

# ②

- 環境 によって左右されることへの憤り
- 挑戦 する 機会 を与えられる  
幸せの方向の多様性、を認められる環境へ
- やりたいことが受け入れられる日本と海外を比較して、  
顔色うかがわない
- 人との出会い をたくさん!

# ③

- 社会の当事者 である 意識 を持つ、生きていく
- 世の中へ 発信 していく  
50年後の社会をどうしたいか
- もっと若者は大人(年上の)に 頼る べき
- つながり を作る
- 色々なことを経験して 成長 する

# ④

- 年金、先が見えない
- ロールモデル が40年代とまり
- 第1人者 として生き方を  
どの時代も…?
- 結婚 できるか、
- 何が幸せか  
↳ 働き方の変化

40代

① 人類愛 家族 人を育てる (役割) 上の世代をおさえる  
 視野を広く 相手の人生を尊重  
 本当にやりたいことを実践する 自分 健康  
 エネルギーを計算して使う 人生の残り大切に

② 負の遺産を残さない 今の若者が今の年齢より幸せに  
 争い事のない世界  
 上の世代に死に方をしっかりと示してほしい

③ 若者のジャマをしない させない  
 Bot 社会を転換させる 信じられる未来を本気で作る  
 固定概念をこわして 再構築する 例年通りをやめる

④ これまでの生活 地位がなくなる  
 未熟さ 時間切れになること  
 無意識の老害 知らないことかほずかしい  
 病気

30代

① Family 人のつながり  
 家族の誕生(生) 別れ(死)  
 自然...  
 同僚の期待に  
 自分が本当に  
 したいことを  
 大切にすること

② 安心して生活できる社会  
 次世代の子もたちが自分や家族のことか  
 できる社会 日本/100年まで生きてほしい!!!  
 だが 干渉しにくい社会 (やりながしがいい社会)  
 失敗も受容できる社会

③ 社会の願いを執行する!!! 実行する!!!  
 つながり 役割 (先祖の願い → 30代から)

④ 視野が狭くなる 安全圏で重なること  
 ↳ 自分への対し 経験  
 キャリアアップ 次の生活を考えたこと

50代

① 健康  
 穏やか  
 尊重 謙虚

② 平和  
 安全 安心  
 暮せる社会

③ 語り部 傾聴  
 経験 体験 知識 背中押し  
 聞き手

④ お荷物になること  
 老い 拒絶

① 自分が大切にしてほしいとは?

- ・自分を信じること
- ・人へのほど  
↳ 愛情を注ぐ
- ・時間/今が大切
- ・思いやり
- ・ゆるすこと。

③ とりこまします。

Overlook  
の  
グ  
ム  
ー  
グ  
で  
す

③ とんな役割があるとは?

- ・「失敗はok」 受容(たり), 挑戦を若, 世々に促す。
- ・包容力 ← 親にもしてあげる
- ・若者。邪魔しない
- ・「背中」でさせる = 行動を促す
- ・失敗談を語り。
- ・有る力ぬいてよく生きることを促す
- ・人は男と女に存在することに促す
- ・でも優しくも生きてます! ネットがあたり前でない世代の価値観をつたえる
- 若, 世代はとびこまします。自由にやらせてok!

② 社会のぬかいは何処?

- ・信頼に下ろす。何層でもやり直し
- ・弱者を見捨てるな!
- ・社会の創りの「障害」をなくす。  
↳ 障害も個性だと認識する
- ・社会の「評価軸」が複数に。
- ・正かいいととびこまします。
- ・争いにならない。環境も大いに持続可能な

④ 「恐れ」は何処?

- ・「おまじない」は(い) → 神々にお願いをかけること
- ・「能力がはたさず」で「甘んじろ」人の世話に存するのはイラ(おこ)り
- ・「要の認知症」 → おまじない「全滅するおまじない」誰かの役に立たない
- ・仕事 → 「おまじない」を認識 → 自分で「年をとるせいでミス」を認める
- ・自分の価値観を押しつけておまじない
- ・先に答えるおまじないを言うおまじないがある(知るかおまじない)
- ・戦争 - 記憶が失われる
- ・挑戦し続ける

15:30 多世代グループで、ワーク

- ・ テーマ「世代の多様性が分断（反発や抵抗）ではなく、  
豊かなりソースとしていかしあうには何が必要か」



〈各チームからのコメント〉

- ・ 多世代と言っても、年代でひとくくり、一つの種類みたいにされてしまうが、1人1人違うので、世代間で何かをやる場合、固有名詞で付き合える関係性を作っていくのが大切なのではないか。その手段として、お互いのライフストーリーを話したりできるといいのではないか。
- ・ あえて話し合いに来るのはハードルが高いから、目的のない集まりの場があってもいいのでは？
- ・ 相手を理解するために、傾聴の力、尊重する力、謙虚な姿勢がお互いに大切なのは。20代が30代、40代に話すよりも、50代に話す方が話しやすいということから、50代以上が20代と30,40代をつなぐ役割になっていけるのではないか。
- ・ 今日この場に来ている人たちは、若者を応援しようとしている大人が多いが、こういう場から波及していくようになるといい。こういう場をもっと作れるといいのでは。
- ・ 今まで世代が上の人と何かをやらうと思うと、意見を押し付けられると思っていたが、今日のワークショップを通じて、上の世代が下の世代を思いやってくれていることがわかり、自分の見方次第なのだわかった。大学生くらいの若者が多世代でのワークショップに参加できると、多世代がどのように考えているかがわかるので、もっと大学生がこういう場に参加できるといい。
- ・ 若い子しか持っていないリソースもたくさんあるので、上の世代は、そういったリソースをしっかりと取り入れるというのも大事。
- ・ 20代だけでなく、30代も40代も50代も悩んでいる。上の世代が、若い世代と話すときに、俺が20代のときにはという話や武勇伝ではなく、今も実際に悩んでいるというような、お互いの悩みを打ち明けられるような場があればいいのではないか。
- ・ 20代は、50代以上よりも、30代、40代の方が怖いと感じている。身近に、安心できる関係性、斜めの関係性を作れる場があるといい。
- ・ 大人は自由にやっていいというが、自由にやると、結果、「待て待て待て」と言われる。上の世代がいう自由というのは、どこまでが自由なのか、しっかり定義して、伝えてほしい。せっかく、自由にやったのに、結局、ダメだと言われるという経験が多い。
- ・ 世代によって、生きてきた社会背景が違うので、お互いの世代の境遇を理解し合おうとするのは難しい。その中で、なにに世代はこうすべきという議論よりも、何年に生きてきた私は、こう考えているというような話ができるといいのではないか。それが、固有名詞でつながるというこ

とにつながるのでは。

- ・40代、就職氷河期、50代バブルに就職スムーズ、親は戦争を経験している世代、30代、ITバブルが就職の時は盛んだった世代、20代、とりあえずやってみよう！が少ない。もっと遊べよ！と言われる世代、遊ばない？真面目？。それぞれの世代の社会背景を理解することも大事。

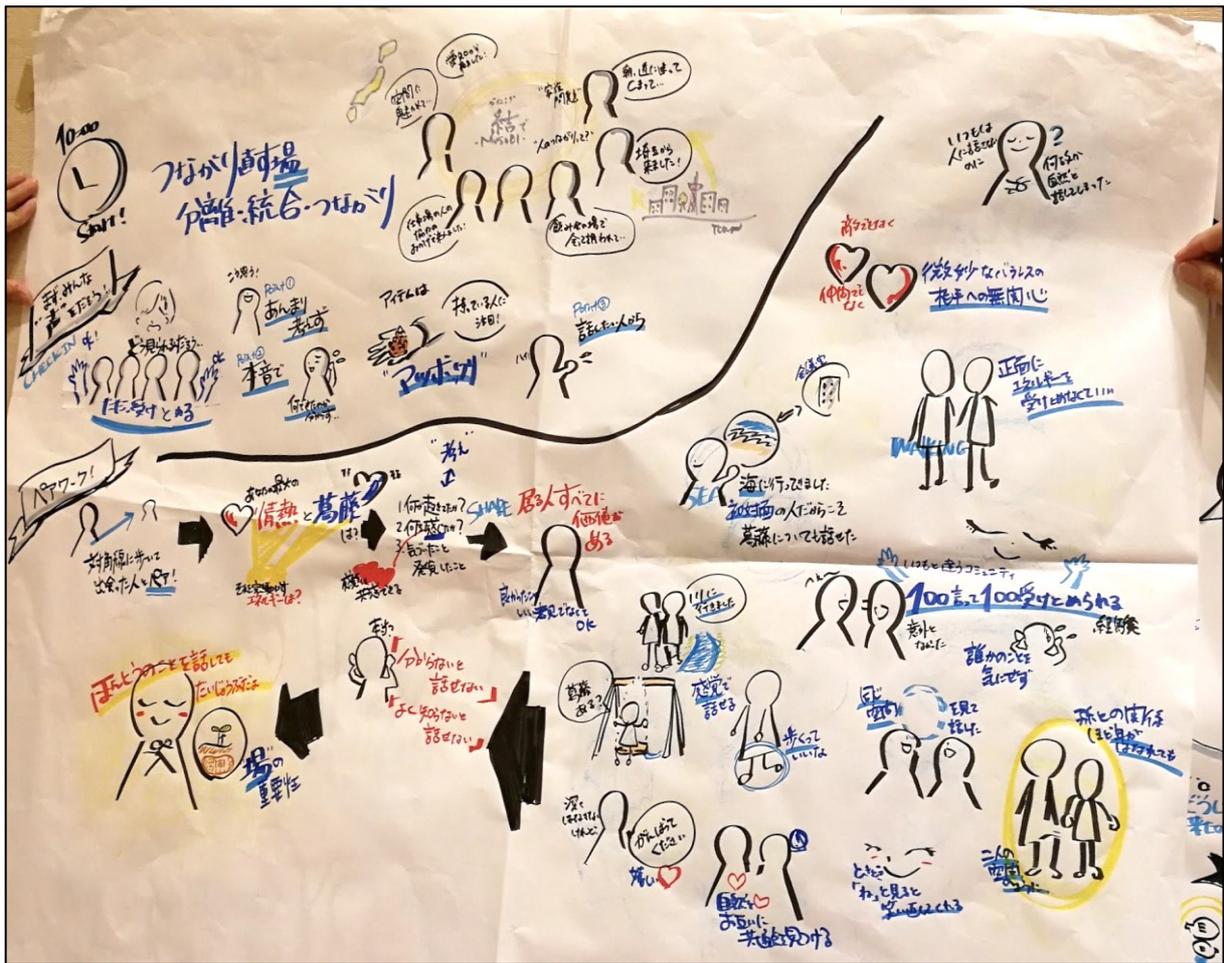
#### 16:30 チェックアウト

〈今、あなたの胸に浮かぶ問いは何ですか？〉

- ・今日、上の世代の話を聞いて、自分の中の思い込みが外れた。今日の上の世代の参加者の皆さんは、下の世代を応援したいと思ってきている。でも、それが今の社会には反映されていないように感じている。どうしたら、今の社会につなげることができるだろう？（20代）
- ・上の世代が若者を応援してくれている、なるべく邪魔にならないようにしようと意識してくれていたことを知って、今まで、おせっかいだと感じてしまっていた自分が、申し訳なく思えた。今日のような場、きっかけの場がもっとあればいいし、もっと作っていきたい。（20代）
- ・今日の場の経験を、コミュニティにどう持ち帰ることができるのか考えたい。多世代の意見を聞ける場というのは、とても大切だから、もっとこういう場に参加していきたい（20代）
- ・誰かに何かを期待される場が多くて、どう見せたいかが先行していて、自分のことを見つめられる場がなかったけれど、今日の場は自分のことを見つめられることができた。固定概念やプライドを置いて、いることができた。この場でできたこの体験を、今、所属しているコミュニティにどう繋げていくことができるのか、考えたい。（20代）
- ・多世代であることが重要というよりは、多様な人が集まって話ができることが重要なのだと思う。今日この場に來ている人は、目的が同じだったから、安心して、話すことができたのだと思う。多世代で話すことと、目的を同じにすること、どちらが難しいんだろう。（20代）
- ・上の世代に対する、自分の思い込みにたくさん気がつくことができた場だった。（20代）
- ・生きてきた時代が違うので、世代間がわかりあえないというのは仕方がないかもしれないけれど、わかりあえないという事実を受け入れて、どうやってコミュニケーションをとるのか、そこを考えていきたい。（20代）
- ・多世代間でのギャップはあるなあと改めて気がついた。それぞれの世代、みんな頑張っているんだなあと。今日の場の学びを普段の仕事にどうしたら活かせるだろう。こういう場というのは、みんなが持てる場ではないので、なかなか参加できない人たちに、どうやって伝えていけるだろう。（50代）
- ・多様性がある場って、自分の幸せにどう関係があるのだろう。知っている人と付き合う方が楽だけれど、なんで多様性が善として扱われるのだろう。（50代）
- ・若い人は、年寄りのアドバイスを欲しい時もあるんだ！という気づきがあった。（50代）

#### 17:45 解散

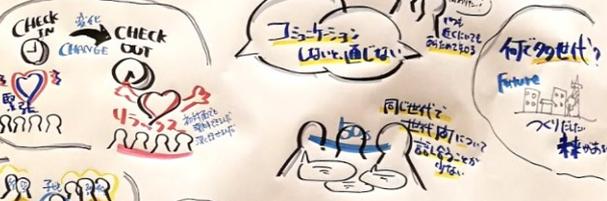
<多世代ワークショップ グラフィックレコード>



CHECK OUT 人生は問いで変わる  
→ どのように生きようか?



Next  
で、どうするの? (どうやって?)



#### 4. 多世代ワークショップ振り返り

##### (1) 青少年問題協議会委員参加メンバーの振り返りより

- ・若者が動こうと思ったときに50-60が障壁になっていたシーンは町づくり。多世代というキーワードと町づくりに関連がある。
- ・世代はギャップ。20年前と今とは違う。(年代の違いのほかにコホートの違いがある。)一昔前は自分の若い頃を次の世代のモデルとして適用できた。今は通用しない。単に自分の20代の頃の若者像を今の20代に当てはめることは出来ない。本当は分からないはずなのに当てはめて語ってしまうことに問題がある。文化的なコンフリクトを及ぼすことにつながる。
- ・若者は若者の居場所がない。老人は老人の居場所がないという。子育て世代も居場所がない。空白地帯。求めている。
- ・行政的にやると縦割りに居場所をつくることになる。でも皆が欲しがっているのは一つ。
- ・ロールモデルは40歳代まで。という話が出た。それ以上だと自分がどう生きていくかの参考にはならない。20代からみて30-40代はすぐ上だから、怖い。でも年代が離れてしまうと(ロールモデルとして)役にたたない。
- ・40代は20代、50代をつながなきやと思っていた。実は20代からみると、30代、40代が壁になっていると認識されていたことに驚きを覚えた。

##### (2) ファシリテーターからのコメント(振り返りミーティングから抜粋)

- ・分断をつなぐのは大事。人は異質なものを忌み嫌う性質がある。分かりたいからこそ痛みがある。痛みから逃れるために切り離したいという反応になる。これはあきらめの反応ともいえる。それが人間の全てでないことを捉えるためには体験する必要がある。説明しても駄目。→他の世代を切り離すではなく、つなぐのが大切。
- ・世代で分けると、多世代の異質性が健在化する。ラベルをつけてみることで、普段無意識にどうラベルをつけているかに向き合うことができる。それを体験する必要がある。
- ・多世代で分かれて話し合うことによって、自分が無意識につけているラベルや偏見に気づき、互いに説明、理解する機会ができる。(多世代で分けたくないという意見に対して)
- ・エルダーシップ。長老になっていくということが世界の文化にある。生き抜く知恵がエルダーにはある。それを伝えるのが長老の役目。魂の位が上がっていく。今の日本の文化では長老はいない。自分のエゴだけになってしまう。本来長老は語るものが役割。次の世代を考える。それがないが故の今のこの議論。ストーリーを通して語る。エルダーシップのある文化を創ると違うコミュニティができる。
- ・コミュニケーションのリテラシー(感情や反応の扱い方)を学んでいないと、コミュニケーションがとれない。一回でも反応の扱い方を学び、理解しあえる経験をすると違う。
- ・場を作る人のリテラシーを高めないといけない。
- ・若者の意見を聞く。場をホールドする人がいないとそれが出来ない。
- ・これを同時多発的にやるにはどうするか。これを施策にできるかが問題。

## 5. 多世代ワークショップ事前準備会報告

実施日：2017年8月19日（日）10時～17時

参加者：10名

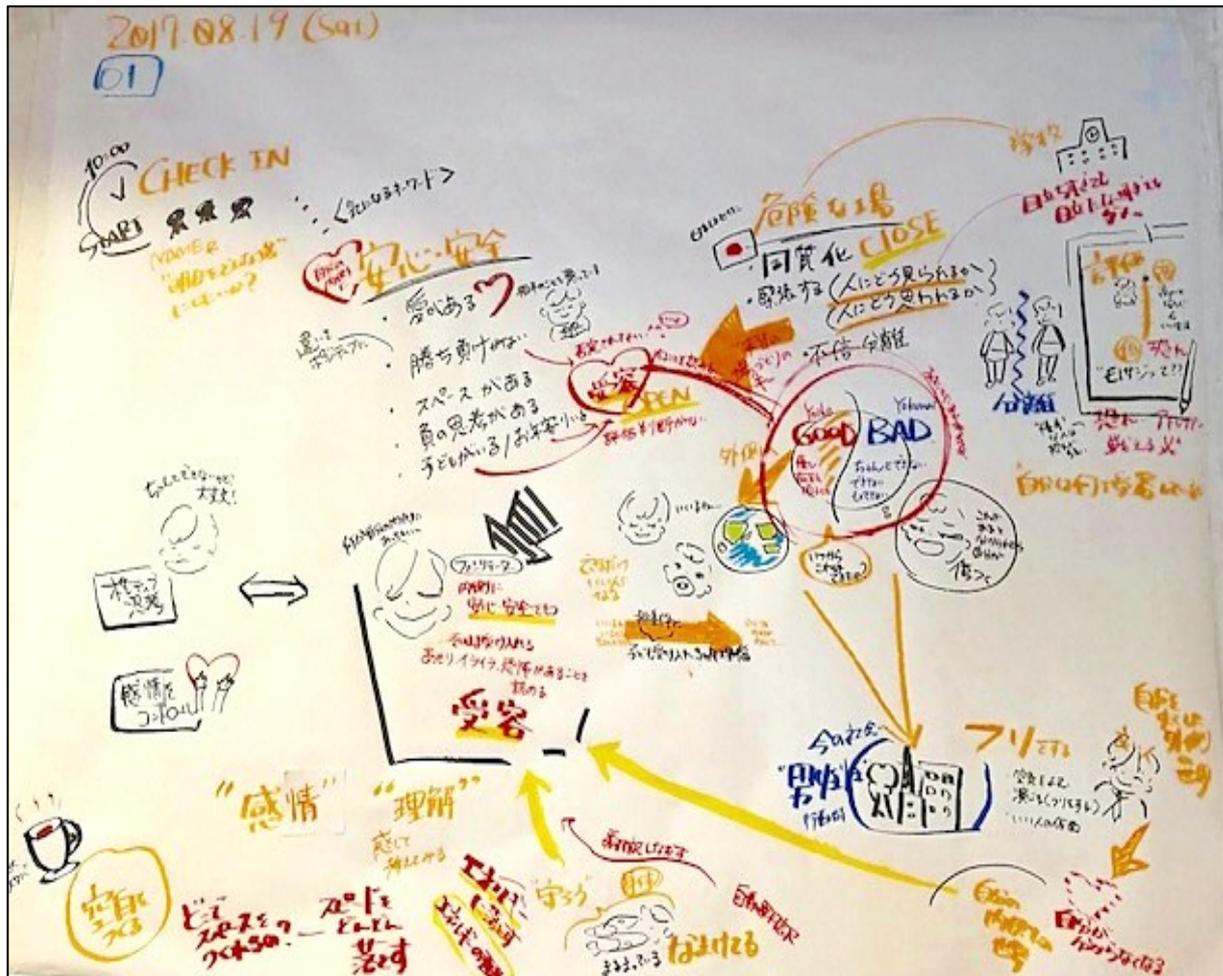
青少年問題協議会委員4名、県職員2名、大学教員2名、

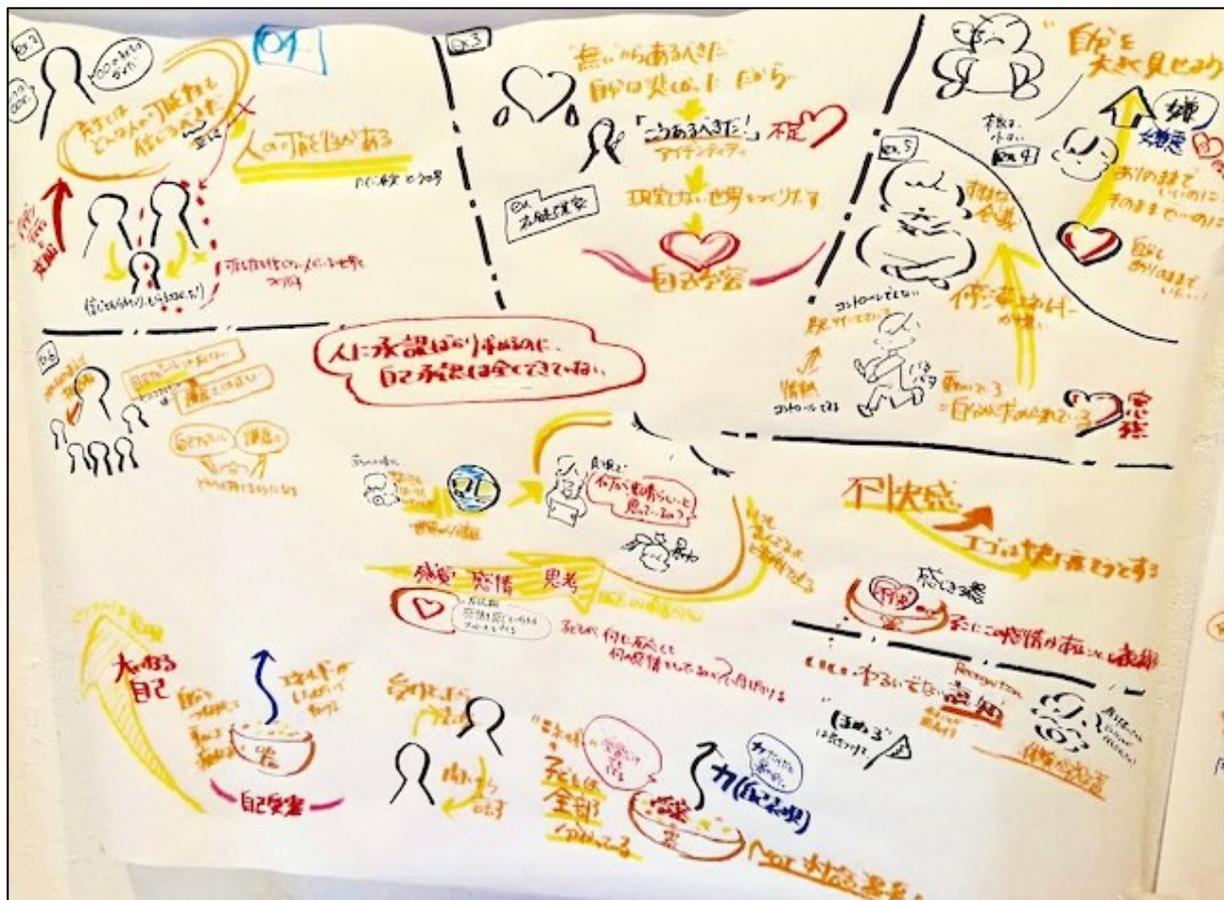
ファシリテーター1名、グラフィックファシリテーター1名

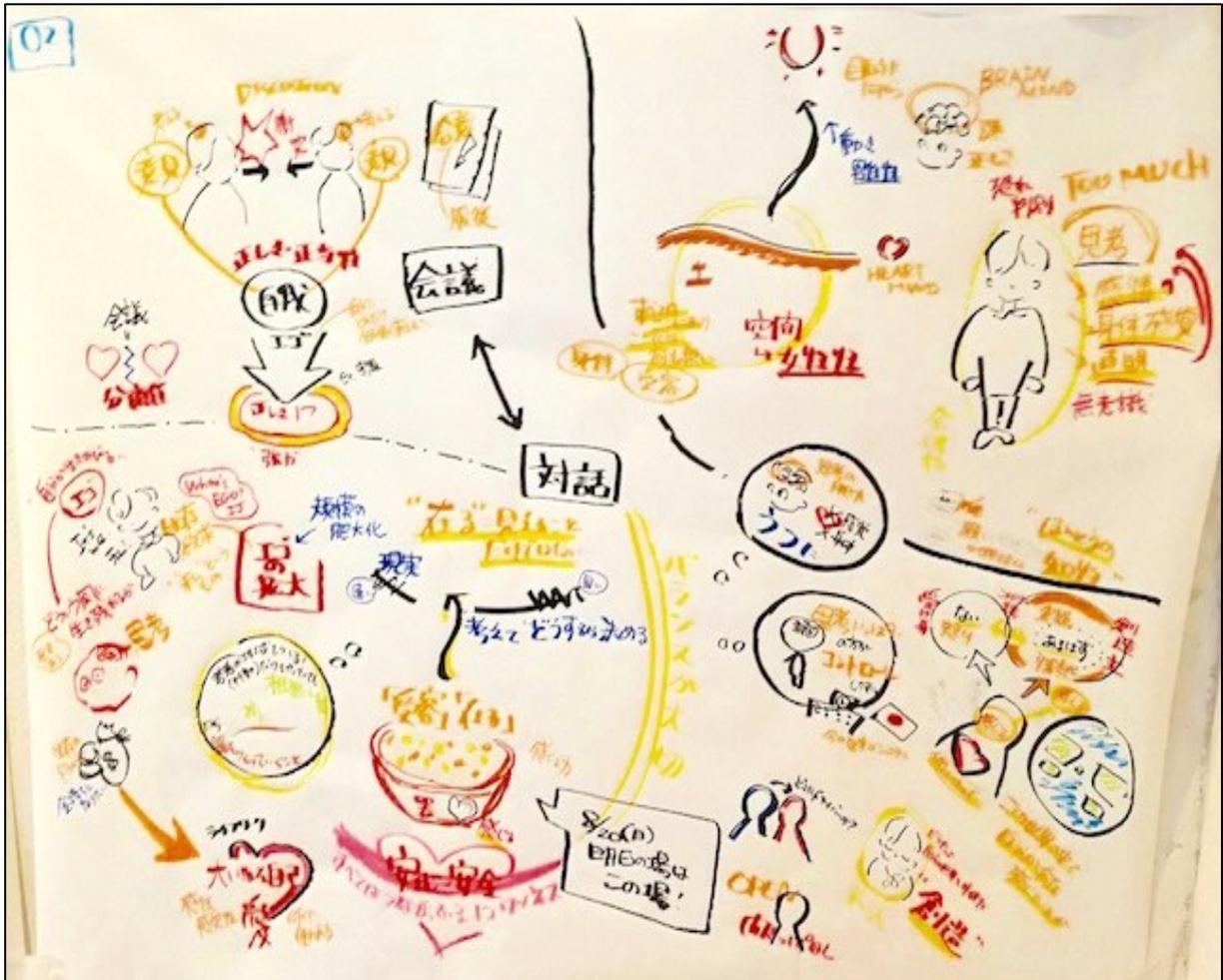
実施内容：翌日20日に行う多世代ワークショップに向けて、安心安全な場作りについて学んだ。



### <事前準備会のグラフィックレコード>









# 資料編

平成28・29年期神奈川県青少年問題協議会 審議経過

開催日	会 議	主な審議内容
平成28年 9月6日（火）	第1回協議会	<ul style="list-style-type: none"> <li>・会長、副会長の選出について</li> <li>・平成28・29年期審議テーマについて</li> <li>・企画調整部会委員の選出について</li> </ul>
同日	第1回企画調整部会	<ul style="list-style-type: none"> <li>・部会長、副部会長の選出について</li> <li>・協議スケジュールについて</li> <li>・委員意見発表、意見交換</li> </ul>
10月13日（木）	第2回企画調整部会	<ul style="list-style-type: none"> <li>・委員意見発表、意見交換</li> </ul>
12月8日（木）	第3回企画調整部会	<ul style="list-style-type: none"> <li>・委員意見発表、意見交換</li> </ul>
平成29年 2月10日（金）	第4回企画調整部会	<ul style="list-style-type: none"> <li>・中間時点での議論の整理(案)について</li> <li>・平成29年度の展開について</li> </ul>
3月30日（木）	第2回協議会	<ul style="list-style-type: none"> <li>・企画調整部会中間報告について</li> </ul>
同日	第5回企画調整部会	<ul style="list-style-type: none"> <li>・平成29年度の展開について</li> </ul>
6月1日（木）	第6回企画調整部会	<ul style="list-style-type: none"> <li>・実践検証事業（案）について</li> <li>・最終報告の骨子について</li> </ul>
9月5日（火）	第3回協議会	<ul style="list-style-type: none"> <li>・企画調整部会における審議の進捗状況について</li> </ul>
同日	第7回企画調整部会	<ul style="list-style-type: none"> <li>・最終報告に向けた整理検討事項について</li> </ul>
11月1日（水）	第8回企画調整部会	<ul style="list-style-type: none"> <li>・最終報告（素案）について</li> </ul>
12月19日（火）	第9回企画調整部会	<ul style="list-style-type: none"> <li>・最終報告（素案）について</li> </ul>
平成30年 1月31日（水）	第10回企画調整部会	<ul style="list-style-type: none"> <li>・最終報告（案）について</li> </ul>
同日	第4回協議会	<ul style="list-style-type: none"> <li>・最終報告（案）について</li> </ul>

## 平成28・29年期神奈川県青少年問題協議会委員

会 長	笹井 宏益	(玉川大学学術研究所教授) *
副会長兼 部会長	萩原 建次郎	(駒澤大学総合教育研究部教授) *
副部会長	坂倉 杏介	(東京都市大学都市生活学部准教授) *
委 員	小川 久仁子	(神奈川県議会議員)
	嶋村 仁志	(一般社団法人TOKYO PLAY 代表理事/日本冒険遊び場づくり協会理事) *
	田中 多恵	(特定非営利活動法人エティック横浜ブランチャーマネージャー) *
	はかりや 珠江	(神奈川県議会議員 ~平成29年5月28日)
	藁田 薫	(認定特定非営利活動法人育て上げネット若年支援事業部担当部長) *
	宮島 真希子	(特定非営利活動法人横浜コミュニティデザイン・ラボ理事) *
	松田 良昭	(神奈川県児童福祉審議会委員長)
	村田 優也	(公募委員(大学生)) *
	山田 貴子	(慶応義塾大学大学院政策・メディア研究科特任助教/株式会社ワクワーク・イングリッシュ代表取締役) *
	米村 和彦	(神奈川県議会議員 平成29年5月29日~)

- 任期は平成28年7月20日～平成30年7月19日
- \*印は企画調整部会委員

